

今月の発信〈あごら沖縄〉



# 沖縄から発信!

177号

## ◆PKO法を溶かそう

——わたしの一つ宣言を/ 高里鈴代

## ◆沖縄の山・海はいま…

——「本土なみ」がもたらしたもの 浦島悦子

## ◆タバコは環境問題・女性問題

沖縄市職女性部5年間の“タバコ・ウォーズ” 伊良部裕子

## ◆献体、それは最後の置きみやげ

——平良玲子

## ◆凄惨! 首里城地下の沖縄戦

琉球新報32軍司令部壕取材班

## ◆魂をみがく 崎村尚美

〈あごらメイト〉出すぎる杭は打たれない ——

〔崎山律子さん〕 源 啓美

〈インタビュー〉24年間新聞配達 ——

“悪いことはしません”

広島県選挙区初の女性国会議員

〔栗原君子さん〕

目次

P K O 法を溶かそう	高里鈴代	1
沖縄の山・海はいま……	浦島悦子	2
タバコは環境問題・女性問題	伊良部裕子	14
献体、それは最後の置きみやげ	平良玲子	28
凄惨！ 首里城地下の沖縄戦	琉球新報三二軍司令部壕取材班	33
気になる英語 バルネラビリティー	奥川 睦	59
めじゃーなりすとのめ 魂をみがく	崎村尚美	60
あごらメイト 出過ぎる杭は打たれない 崎山律子さん	源 啓美	62
あごら読書室		64
集会から		66
テレビから		72
あごらのあごら		76
編集後記		87

# PKO法を溶かそう 私の一つ宣言を！

高里鈴代

さる五月、国連カンボジア暫定統治機構の明石代表が、「沖縄に国連軍のための要員訓練基地、物資集積基地の建設を提案」し、沖縄の人びとを震撼させた。東京中心の全国版のマスコミでは重大発言としては扱われなかったが、沖縄は騒然となった。しかしこの反応に対し彼は、「アジアの和平の大きな拠点、日本と世界の接点になる新しい国際理解のベースとしていいと思ったが、ややせっかちな反応で残念」と述べた。軍事基地の重圧に、命・人権・生活が侵害されているこの沖縄の現状を直接触れたことがない彼の、なんと無神経な提案、その後の発言であろうか。

「慰霊の日」の平和集会で、フィリピンのエマ・カントーさんは、「PKO（平和維持活動）は『ビープル・キーリング・オペレイション』ではないのか」と、鋭く私たちに問いかけた。お祖父さんを日本兵に殺されたという彼女の個人的体験からの懸念ではなく、エマさんと共に「軍事化と女性」国際会議に参加したアジア諸国の女性たちも同意見だ。

派遣時期の早まり、宿舎に冷房設備か、隊員へのコンドーム支給かなど、参議院選挙の結果が大きな弾みとなっている。私たちが法成立にどうしようもない無力感、虚脱感におそわれている中で…。今、私は数年前のフィリピンでの女性会議から持ち帰った濃いピンク色のTシャツを着続けたい気持ちでいる。うずくまる女性、顔を上げた中腰の女性、そして立ち上がる女性の姿が重なるように描かれているTシャツを。

そう、うずくまってはおれない。PKO法を溶かそう。わたしたちの手で……。

慰安婦問題に確かな解決を見ることが、真実を伝える歴史を教えること。

人びとの実情を知るファーストハンドの情報を得ることが、伝えること。  
税金の使い道を監視すること、女性を政治の場に送り出すこと。

そして、女性の全体性を侵すものに敢然とノー！を。

海を越え、国籍、国境を越えて助け合おう。涙を、汗を、拭い合おう。人権を、命を、支え合おう。冷たい武器ではなく、温かい血のかよった心と手で。

## 沖縄の山・海はいま……

### 「本土なみ」がもたらしたもの

浦島悦子

#### 死の海から

「ゴバルト・ブルーの海」を求めて、今年も沖縄にたくさんの観光客がやってきた。彼ら、彼女たちが求めるものを得たのかどうか、私に知る術（すべ）はない。

しかし、先日、海水浴を楽しみに出かけた本部（もとぶ）——沖縄本島北部地域にある——の海は茶色に濁り、しかも生活排水がすぐ近くに注ぎこんでいるとあっては、とても水に入る気になれず、むなしく帰ってきた。潮が干いてあらわれた珊瑚礁（の残骸）の上には泥が膜のようにはりつき、それでも小さな貝たちが泥をかぶりながら健気に生きていた。かつては豊かな海であったことが手にとるようにわかるだけに、目の前の荒涼とした（そう、まさに！）陽射しはじりじりと焼けつくようだったが、どこかに冷たい風が吹いていた）風景が痛々しかった。

私が沖縄の海に入りたいと思わなくなってから十年以上が経つ。晴れた日、上から見

いる限りでは、沖縄の海はまだ透明で青い。しかし、いったん海に入ると、海底に積もった赤土がかき乱されて舞い上がり、その濁りの中でじっと眼を凝らせば、見えるものは、行けども行けども続く珊瑚たちの死骸……。ここは墓場。ここは死の世界。魚たちはどこへ行ったの？……。海に入れば胸が痛むから、私はもう長いあいだ海に入ったことがない。雨の日、事態はさらに深刻だ。沖縄の島をとりまく海はまるで、血の池地獄と化し、川からはさらに、真っ赤な濁流が次々と注ぎこまれる。北部の海がとくにひどい。いったい元凶はどこにあるのか。大量の赤土を流しつづける川をさかのぼってみよう。そして、そこで私たちが見たものは……。

山も殺されている

\* \* \*

悠久の昔から、私たち人間は他の動植物とともに大自然の中で生かされていました。地球上のそれぞれの地域はお互いにつながりつつも、それぞれの地理的条件のもとで固有の自然をかたちづくり、固有の種をはぐくんできました。

その中でも、私たちの住むこの琉球の島々は、他に類を見ない豊かな自然条件に恵まれて、「東洋のガラパゴス」といわれる多種多様の生き物たちを育て、私たちの先祖はこの風土の中で、香り高い文化を築きあげてきました。とりわけ山原（やんばる）の山々は、たくさん野生生物たちのふるさとであると同時に、私たちのいのちの水と、木材をはじめとする山の幸を供給し、心をいやしてくれる、いのちと心のふるさとでもあります。

戦火に焼かれ、戦後復興のためにたくさんの木が伐り出されながらも、自然の営みの中でたくましい再生を遂げてきた山原（やんばる）——沖繩本島北部山地の総称——の山々が、近年、急速な勢いで破壊され、変貌してしまっていることに、私たちはたいへん心を痛めています。

この間、何度も山に入った私たちは、縦横に走る林道が緑の森を切り裂き、至るところでブルドーザーやチェーンソーがうなりをあげ、リゾートやゴルフ場開発、農地造成などが山を削り谷を埋め、「バリカン刈り」と呼ばれる皆伐による表土の流出や山崩れ、沢崩れが多発し、植林されたはずの木も、栄養分の流失と強い風雨にさらされて、ほとんど成長していないという現実を眼のあたりにしてきました。

「本土復帰」以降の沖繩振興法による国の高率補助が、これらの開発や林道開設、森林伐採の大きな推進力となってきたことは、周知の事実です。また、全国一律の森林計画が、沖繩の固有の条件を無視して押しつけられてきたことによって、山の破壊にいつそうの拍車がかけられたことも見逃せません。

このような中で、国の天然記念物であるヤンバルクイナやノグチゲラ、ヤンバルテナガコガネ等をはじめとするたくさんの貴重な生き物たちが、その生息域を分断され、棲みかを追われ、絶滅の危機に瀕しています。人家近くに営巣せざるをえないノグチゲラや車にはねられたヤンバルクイナの悲劇は、私たち人間の明日の姿をも示唆しているようです。

水不足が叫ばれながら、ダム周辺の水源涵養林さえ丸裸にされているという矛盾。さら

に、山から流れ出した赤土は、川から海に流れ込んで川や海の生態系を破壊し、殺しつつあります。いのちのみなもとである山の破壊がもたらす影響の深刻さを思うとき、私たちは、この島の将来に対する大きな危惧を覚えざるをえません。

沖縄観光の売りものであった「ゴバルト・ブルーの海」は、もはや「昔話」と化し、雨の日に川や海を真っ赤に染める赤土は、山原の山々が身悶えしながら流す血の涙であると思われてならないのです。

もとより私たちは、森や山によって生活の資を得ている人びとの生存権を否定するものではありません。否、むしろ、現在のような開発や森林伐採がさらに進めば、それらの人びとの生存権すら脅かされることは、火を見るよりも明らかです。

これまで、森林伐採や開発を優先し、このような現状を引き起こした林務行政の責任は重大であると言わなければなりません。

さて、昨今の東西緊張緩和の国際情勢を背景に、沖縄の米軍基地の一部が順次返還の方向にあり、「復帰二十年」を期して返還が決まった軍用地の中に、北部訓練場の一部も含まれています。

八千三百ヘクタールの北部訓練場は、今や山原の中で手つかずの天然林が残る唯一と言っている地域です。林道や伐採地、造成地等に寸断された生息地を逃れた野生生物たちの安住の場が米軍用地であるという歴史の皮肉もさることながら、返還される森林がまたしても開発や伐採の波に呑み込まれてしまうのではないかとの不安から、私たちは北部訓練場の返還を素直に喜べない現状におかれています。

高率補助による天然林伐採・林道開設を主体とした開発優先の林務行政がこのまま続くならば、山原の山々はほんとうに消えてなくなってしまうのではないかという強い危機感を拭い去ることができません。もはや事態は、一刻の猶予も許さないところまできているのです。

天然林・原生林は、「有用・無用」という人間の目先の価値観をはるかに越える大きな恩恵を私たちに与え続けています。山原の森は、天然記念物だけでなく、有名・無名の多くの動植物をはぐくむから貴重なのです。先祖代々、受け継がれてきた、この世界に誇る宝を損なうことなく、子々孫々まで継承していくことは、現在を生きる私たちの歴史的責務でもあります。

\* \* \*

以上の文章は、沖縄の山も海もことごとく破壊されてしまっていることに、切羽つまった危機感を抱いた沖縄県内十六の市民グループと全国自然保護連合が連名で、今年五月十二日、沖縄県知事あてに提出した「森林伐採、林道開設およびすべての開発を即時中止し、山原の貴重な自然を子々孫々に継承するための緊急要請」の長い前文である。そして私たちは具体的に、次の二点を要請した。

一、山原全域で現在進行中もしくは予定されているすべての林道開発、森林伐採および開発をただちに中止し、その必要性、施工方法等を抜本的に検討しなすこと。

二、今回返還される北部訓練場の一部および今後返還される北部訓練場の跡地利用については、天然林の保護を第一とし、国設鳥獣保護区に移管すること。



沖縄県の環境行政をつかさどる環境保健部と林務行政をつかさどる農林水産部をとおして、私たちはこの要請文を提出したが、その際に行政側が示した姿勢は、予想していたこととはいえ、現状に対する認識のあまりの違いで私たちをあきれさせた。

出張中の環境保健部長の代理で出てきた次長は、「あなたがたの気持ちもわかるが、大人社会の要求もあるので……」と、開発や森林伐採をやるのは大人、自然保護を言うのは子ども、といわんばかりの発言でひんしゆくをかい、また農林水産部長は、「天然林は放置しておくダメになるので、最低限の造林（現状では伐採のこと）や、林道開設は必要だ」と言ったが、天然林の価値をカネでしかはかろうとしない発想の貧困と、やんばるの尾根尾根をつらぬいて走る二車線の舗装道路（来年の貫通時には全長三十七キロとなる大国林道）や、「造林」という名目で一木一草も残さず刈りとってしまうのを「最低限」と言いくるめる傲慢さに、私たちはどうしても納得することができなかった。

### 高率補助と「本土なみ」がすべてを破壊した

行政への働きかけの中で、広汎な世論を呼びさまし、その力によってしか行政の姿勢を変えていくことはできなさと感じた私たちは、要請に名を連ねた県内のグループを中心に、へやんばるの山を守る連絡会を結成し、その最初の取りくみとして、八月一日（土）、

「復帰二十年、沖縄の山・海は訴える——高率補助と開発の影」と題する集会を行なった。折しも今年は沖縄の「本土復帰」二十年にあたり、さまざまな行事やイベントが行われ

ているが、復帰二十年は何だったのか——を自然環境の面から見るとき、それはお祭騒ぎやお祝いムードから最も遠いところにあると言わざるをえない。

この二十年間、「本土なみ」のかけ声のもとに行われてきた開発や施策が何をもたらしたのか、「復帰」二十年はまさに自然破壊の二十年にほかならなかったことを知ってほしい、破壊された山や海の叫びを聞いて下さい、あなた自身の魂の叫び声に耳を傾けて下さい、という私たちの訴えに応えて、当日は、沖縄各地で市町村の祭や花火大会、その他たくさんのイベントが催されるという悪条件にもかかわらず、三百人を超える参加者を得ることができた。

〈素もぐりダイビング協会〉の吉嶺金二氏が海からの報告を、〈山原の自然を歩む会〉の玉城長正氏が山からの報告を、どちらも三十年以上、海や山を見守りつづけ、その変化をカメラにおさめたスライドを使って行なった。参加者は、沖縄の海や山が健全だったところの自然の豊かさ、美しさに感動し、それがどのように破壊されてきたかを示す生々しい映像に衝撃を受けた。スライドと講演のあと、〈金武湾を守る会〉、〈沖縄―八重山―白保の海とくらしを守る会〉、〈リゾートを考える女性の会〉からの報告、歌手・喜納昌吉氏の自然保護を訴える弾き語り、四時間におよぶ長い集会だったが、最後まで静かな熱気に満ちていたように思う（単なるひとりよがりかな?……）。

多様性にみちた沖縄の自然環境は、亜熱帯であること、台風常襲地域であること、黒潮に洗われる島しよであること……等、沖縄特有の自然条件が長い年月を積み重ねてつくりあげたもの。地球上に同じ人は一人もいないように、自然の中のどの個体も、どの部分も、

唯一で、かけがえのない一回性を生きている。やんばるや西表島の原生的自然林も、沖縄の島々をとりまく珊瑚礁の生態系も、地球上の他のすべての地域と同じように、唯一のものなのだ。

おどろくべき強じんと、あつけないほどのもろさを、自然は合わせもっている。沖縄の島々のように、さまざまな条件の絶妙のバランスの上に成り立っている自然は、とりわけもろく、こわれやすい。いったんバランスが崩れてしまえば、それは次から次に連鎖反応をひきおこす。山（森）が病めば、川も海も病み、山（森）が死ぬとき、川も海も死ぬ。山を削ることは、私たち自身の身体を削ることであり、海を埋めることは、私たちの魂を生き埋めにするということだという気がしてならない。

そのすばらしいバランスを、「復帰」以降の一次、二次にわたる沖縄振興開発計画は、高率補助と、「本土なみ」の設計基準・規格、施工方法によって、ことごとく破壊した。深刻さを増す赤土汚染は、最近、地元マスコミでもさかんに取りあげられ、漁業関係者を中心に「赤土防止対策」の緊急性を訴える強い声があがっているが、たとえば最新鋭の機械で海底に積もった赤土を除去したとしても、血（赤土）の出るモトを絶たねば、イタチゴッコを繰り返すだけだ。必要をはるかにこえる農地造成や、さまざまな施設の建設、沖縄の自然条件を無視した開発のあり方、山を丸裸にする皆伐方式等をやめない限り、赤土汚染はなくならないだろう。

私たちはとりあえず、「自然保護」ということばを使っている。しかし、私たち人間が自然を保護しているのではなく、逆に自然こそが、人間をふくむすべての生きものたちを

保護し、生かしてくれていることは言うまでもない。自然の恵みである空気や水や食べものなしに、私たちの誰が一瞬でも生存できるといえるのだろうか？

その自然がいま、沖縄だけでなく地球規模で危機に瀕している。しかも、その原因は人間の営みの中にあるのだ。時あたかも、ブラジルで行われた国連環境開発会議（地球サミット）の余韻さめやらぬころ。自然や環境をダシにした政治取引の場、茶番劇、等々と酷評された（私も、まったくそのとおりだと思うけれど）「地球サミット」だが、いわゆる先進国と第三世界との激しい対立の中から、はからずも、地球環境を救う道は、富める国が自らの生産や生活のあり方そのものを問い直し、変えていく以外にないことを示唆した。

日本は、沖縄の「本土復帰」の年である一九七二年の第十七回ユネスコ総会で採択され、現在までに百二十四か国が批准している「世界の文化遺産および自然遺産の保護に関する条約」（世界遺産条約）を、今回の「地球サミット」を機にやっと批准し、現在、自然遺産の国内候補地選定作業に入ろうとしている。

私たちは、八月一日の集会で、先の緊急要請文での要請に加えて、次の要請を決議し、内閣総理大臣、環境庁・林野庁・沖縄開発庁の各長官、沖縄県知事あてに送った。

一、沖縄の自然環境に『本土なみ』の基準や標準、規格などを当てはめてはいけなかったことが明らかになった現在、これまでのやり方を直ちに中止し、沖縄の自然環境に適合するよう基準や標準、規格などを見直し、自然の復元をはかること。

三、自然遺産の候補地選定にあたっては、関係省庁とともに民間の自然保護団体もふくめて作業を行ない、自然遺産の候補地として、①やんばるおよび西表島の原生的自然林など沖縄固有の生きものたちが棲息する地域 ②石垣島白保のサンゴ海域（カラ岳東海域を含む）を選定すること。

### 破壊しない文明を求めて

私は十年ほど前、琉球弧（奄美・沖縄・宮古・八重山諸島の総称）の各島々で住民運動をやっている仲間たちが創刊した雑誌『リュウキュウネシア』に、「シマの自立と女の自立」という文章を書きかけたことがある。書きかけた、というのは、この雑誌が文字通りの三号雑誌で終わり、私のほうも日々の生活に追われて、連載ものになるはずだった文章の「序」を書いただけで棚上げにしてしまったからである。

七年間の東京生活で、女性解放運動の息吹をいささかなりとも吸い、「男なみ」になることではない女性解放——効率優先でなく、女も男も、子どもも年寄りも、いわゆる「障害者」も、すべての人が、そのありのままの姿で人間としてまっとうに生きられる社会、をめざしたいと考えていた私が、日本の近代化から打ち棄てられ、豊かな自然に抱かれたつも、生き延びる道をさがしあぐねて苦悶している奄美大島のある過疎のシマ（集落）に暮らしはじめてしばらく経ったころのことだった。

とうとう書かれずじまいだったこのテーマは、しかし、今もなお私の心の中にある。と

いうより、その後の奄美での暮らし、現在の沖縄での生活を通して、いっそうその重要性を感じていると言ったほうがいいだろう。

女が「男なみ」をめざすことが、能力主義や効率優先の競争社会をますます助長し、差別や分断を深め、他の国々を抑圧し、ひいては地球環境の破壊につながっていくのと同じように、沖縄が、シマが「本土なみ」をめざすことは、けっして沖縄（シマ）の自立にも解放にもつながらない。

私はいま、〈山原の自然を歩む会〉の会員として、月一回の山歩き（例会）を何よりの楽しみにしている。母なる森に抱かれるその時は、私が人間としての本来の姿をとりもどす至福の時だが、しかしまた一方では、その森のすさまじい破壊を眼のあたりにする苦痛の時でもある。

沖縄の海も山も、「本土なみ」がもたらした惨たんたる状況の中にある。何も沖縄だけが特別に自然破壊されているというのではない。ただ、小さな島々の自然はそれだけでもろく、こわれやすいということであり、沖縄のもう一つの特徴は、開発（破壊）があまりにも短期間に集中的に襲いかかってきたことだ。

風土の激変の中で、長い年月をかけてつちかわれてきた文化は、新しい文化へと産み直される時間も空間も与えられぬまま、土台を失ってよろめき、カネとモノの洪水の中に呑みこまれようとしている。

まだはじまったばかりの私たちの運動が、それでも少しずつ世に知られるようになるに

つれて、土建業者や伐採業者からのリアクションが出てきた。それは一步前進であり、矛盾が明らかになるのはいいことだが、気になるのは、業者の圧力によって、地元マスコミに報道の自主規制の方向が見えてきたことだ。「報道・言論の自由」をたてまえとしつつも、元来が営利事業だからしかたがないといえればそれまでだが、自前のメディアをめざすと同時に、良心的なマスコミ人を孤立させない努力は必要だろう。

私たちはいま、世界史における文明史的転換点に立っている。地球を死に導く破壊の文明を今後も選びつつけるのかどうかの選択をせまられている。これは何ももおおげなことではない。私たちの日々の生活が、この文明を支え、地球環境の破壊をおし進めているのだとすれば、私たちの一人ひとりが、いまいる場で、どんなくらし方をしていくかが、大きな力をもってくる。

変化も混乱も、実のところ私は大好きだ。新しい歴史は常にそこからはじまる。むしろ今回の参議院選にあらわされような現状維持（他者、とりわけ地球の他の地域の犠牲の上にあぐらをかいた）の意識こそがこわい。揺れる沖縄（琉球）の中で、山や森の神々と對話しながら、新しい歴史を切り拓く道を模索していけたらと思う。

※へやんばるの山を守る連絡会／の構成団体は以下のとおりです。●森の会／沖縄の緑と干潟の会／水と緑・糸満市民の会／リゾートを考える女性の会／沖縄リサイクル運動市民の会／久茂地川に清流と緑をとり戻す会／沖縄山岳会／食を通して生活を考える風と土との会／山原の自然を歩む会／沖縄野鳥の会／素潜りダイビング協会／漫湖の自然に親しむ会／沖縄ー八重山ー白保の海とくらしを守る会／宜野湾の水と緑を蘇生させる会／琉球大学ワンダーフォーゲル部／ゆうな農場／比謝川を蘇生させる会／ほか個人

## タバコは環境問題・女性問題

### 沖縄市職女性部五年間の「タバコ・ウォーズ」

伊良部裕子

那覇市職員労働組合女性部（以下女性部という）の五年にわたる禁煙運動について報告します。タバコに悩まされている方々へ、そしてまた、職場で内心「困った」と思いながら、それを発言できずにいる、さまざまな問題をかかえている方々へ、少しでもお役に立てるならばとの思いを込めて。

きっかけ——女性部員と一男性職員からの声

タバコの煙で悩んでいる一女性部員から、役員に申し出がありました。「自分の隣にすわっている人がすごいヘビースモーカーで困っている。つい先日も風邪が治らないので病院へ行ったところ、タバコの吸い過ぎと言われた。自分は全く吸ったこともないのでおかしい？ 考えてみたら、自分の隣にいる男性職員がたいへんなヘビースモーカーであることに気がついた。その余波を受けて、のどを痛め、吸ってもいないタバコの吸い過ぎと言



われ、たいへん心外だ。女性部でこの問題に目を向け、学習会なり、禁煙運動なりをしてほしい」との声でした。

また、男性職員からは、私たちの教宜誌である『おんなたち』に、アスベスト被害のことを掲載したところ、アスベストよりもっと身近なところに健康をおびやかす問題があるではないか！ それは「タバコ」である、女性部はもっとそれらのほうに目を向けるべきでは！ との手厳しい注文がありました。

### 第一回目学習会「タバコ・ウォーズ」——吸わない人の肺があぶない——

私たちは、この声を受けてさっそく学習会を持つことにしました。タバコの害を知ることがまず必要、との認識で、禁煙運動をしている医師の講演会から始めました。この医師は沖縄県立中部病院で呼吸器内科を担当している伊礼壬紀夫医師で、聞いてくれる人が一人でもいればどこにでも出かけて行くというほど、禁煙運動に情熱を傾けている方でした。講演会にあたり、女性部としては一人でも多くの人に聞いてもらいたいとの思いで、精いっぱい呼びかけをしました。その手始めは魅力的なポスターを作ることから始めました。まず、視覚で訴え、タバコを吸う人の問題ではなく、吸わされている人が問題なのだという新しい認識をもってもらうため、副題として、「吸わない人の肺があぶない」と書きましました（ひねくれた人からは、「じゃあ、たくさん吸わなくては」という皮肉も言われたりしました）。さらに教宜ビラを流し、女性だけでなく男性への呼びかけも行いました。ま

(会場からの声)

大盛況でした。たばこの売に比べて、吸っている人ばもちろん吸わない人の差が大きいと云うやれ、きん人々に衝撃を与えました。



た、一日の仕事で疲れ、おなかも空いている人たちへ、おいしいお弁当の用意もあることを伝えました。お蔭で、当日はウィークデー（火）で、雨降りにもかかわらず、九十名余りの職員が集まり、役員をホッとさせてくれました。

日程は、『今、肺が危ない』というビデオ（二十分）を上映し、その後スライドを用いた伊礼医師の講演（六十分）、最後に質疑応答（二十分）で締めくくりました。この『今、肺が危ない』というビデオは、琉球放送の報道番組『RBC特集・報道部発』で放映されたものです。医療現場で肺気腫の患者さんと医師とのやりとり、及び禁煙運動をしている沖縄県医師会の会議の様様を写したものです。四十年間タバコを吸い続けた結果、肺は煙のすすで真っ黒になり、カラカラにかわいて固くなり、その結果呼吸が一人ではできず、日常生活をするのに機械の力（酸素ボンベ）がなければ生きていけない、本人だけでなく家族もたいへんな迷惑である状況を訴えたものでした。また、この番組の中で一番衝撃的だったのは、妊婦のそばで、医者がタバコを一本吸うと、胎児の呼吸が一瞬ストップするという映像です。これは、タバコの煙が、本人だけでなく、胎児にまで悪影響を及ぼすことの証明と言えるのではないのでしょうか？ 伊礼医師の講演は、米国の雑誌等から独自にスライドに作成したものをを用いた非常にユニークで、タバコ社会を風刺したもので、深刻なテーマを笑いのうちに進めてくれました。

タバコは税金が入るから良いじゃないかという役員もいる（たしかに私の周りですういう意見を言う人もいた）が、医療費（肺ガン・肺気腫などの原因はタバコが主）、火事の原因のトップは「タバコ」であるとのことからすれば、税金で入ってくる以上にお金の無

駄遣いがされている事実、またマスコミやポスター等でのタバコのコマーシャルのひどさ、世界中で日本ほどタバコの宣伝がされている国はない等も、初めて知らされるものでした。また冒頭で記した女性のように、「吸わされている喫煙」は受動喫煙（または強制喫煙とも言う）と呼ばれ、タバコを吸う人が、吸った煙の量を調節できるのに対し、受動喫煙の場合は、本人の意志と関係なく、鼻を通して呼吸と共に肺まで吸い込まれ、その煙のほうが、喫煙者の吸う煙より、数倍も発ガン性物質が含まれているという恐ろしい事実も知らされました。

タバコをテーマにした学習会は初めてでしたので、反響は大きく、これまで堂々と吸っていた人が少し立ち止まる姿が見られました。隣の人に遠慮して吸う、許可を取る、席をはずして吸う、などです。ポスターも禁煙マークでしたので、学習会が終わっても貼っておくところも多くみられました。実は、私もそれまで時々、就寝前のほっとした時、酒の席等では吸っていたのですが、これを機にタバコをすっかりやめたのです……。

## 二年目 タバコ・ウォーズ

——あなたもたばこがやめられる（ビデオ撮影やアンケートを実施して）

第一回目の学習会から一年が経ちました。遠慮して吸っていた人たちが、またもこのように堂々と吸っているとの不満の声が聞かれ、再び学習会の必要性を感じ、常任委員会で再度タバコの学習会を行うことにしました。二年目は趣向を凝らし、次のような方法で行

いました。

- 一、あらかじめ全課対象にアンケートをとる。
- 二、女性だけの問題でないで、基本組合と共同主催にする。
- 三、職場の喫煙状況・空気汚染度をビデオに収める。
- 四、当日の講演会に体験発表の場を設ける。
- 五、最後にまとめとして去年の講師である伊礼医師より去年の復習を行なう。

職場のビデオ撮影については、カメラを向けると吸う人もやめる、プライバシーの侵害等で、余りうまくいきませんでした。ヘビースモーカーの人たちに招待状を出すというお手紙作戦については、直接渡すのがたいへんだった、やり過ぎだ、との批判意見もありました。また、基本組合との共催でしたが、男性は消極的でした。タバコを吸ってほしくないと思っただけでも、禁煙運動にはかわりを持ちたくない人が多いようです。

アンケートでわかったことなのですが、職員で吸う人の九九パーセントは男性なのに、灰皿を洗っているのは女性が約半数もあるのには驚かされます。ここでもタバコ問題は女性問題であると言えないでしょうか。また「どこで吸いますか」の問いに対しては、「自分の席の周辺で」という人が大半です。一日中机で仕事をする人は、自分の健康さえも守れない不自由さを味わわれていることにならないでしょうか。

(2) 灰皿は誰が洗いますか。

本　人	掃除 当番除人	女子職員	臨時職員	そ の 他			外にすてる
				(洗わない)	(早くきた人)	(清掃員)	
188 人	31 人	40 人	22 人	54 人	1 人	4 人	灰皿はいらない 1 人

(3) タバコをすう場所はどこですか。

自分の席周辺	廊 下	喫煙コーナー	そ の 他				
373 人	41 人	12 人	(ベランダ)	(トイレ)	(階 段)	(階段の下)	庭
			4 人	9 人	1 人	1 人	1 人

(4) その他、職場における喫煙問題に関するご意見、ご感想をお聞かせください。



# 職場におけるタバコについてのアンケート

那覇市職労  
(1989年5月実施)

調査対象職場・本庁、セントラルビル、水道局、教育委員会、三支所病院(事務局のみ)

職 員 数 75課

	男	女	計(人)
職 員 数	1,136	386	1,522
臨 時 職 員 等	51	190	241
計(人)	1,187	576	1,763

以下の質問に答えてください。

## 1. (1) 職場でタバコをすっている人

男	女	計(人)
425	3	428 24.3%

## (2) 職場でタバコをすっていない人

男	女	計(人)
762	573	1,335 73.7%

## 2. 1(1)と答えた人の一日の職場ですうタバコの本数

0～9本	10～19	20～29	30～39	40～49	50～59	60～79	80～100	不 明
80人	173人	84人	28人	12人	2人	0人	0人	49人

## 3. 職場環境(二つ以上答えてもよい)

※その他の場合( )内に  
具体的に記入すること。

### (1) すいがらは誰が捨てますか。

本 人	掃 除 当番の人	女子職員	臨時職員	そ の 他		
				(早くきた人)	(係りの新人)	(ビル管理の人)
255人	75人	41人	28人	1人	1人	2人

### 三年目職場のお茶・ゴミ・タバコ（行政側も次第に理解を示す）

三年目はこのテーマでシンポジウムを行いました。この席では、行政側の賛同意見も見られ、女性部へのエールが送られました。この後、行政側、職員厚生課では、毎月一回、『禁煙ジャーナル』を発行し、タバコの害や、各地の禁煙運動等の情報を掲載し、全課に配布するようになりました。また市民健康課では市民を対象にした健康展で、タバコ講演会を開くなど、役所だけでなく市民全体に拡がりを見せるようになりました。

また、私たちがこの運動をやってきたお蔭で、ある一つの事業を未然にストップさせたという素晴らしい成果もあります。

市政七十周年（一九九一年五月二十日）を記念して、JT（日本たばこ）が記念タバコを発売するらしいという情報が入ってきました。ちょうど三回目の学習会の頃です。すわや！と間髪を入れずに当時の女性部長が実行委員会に企画を中止するよう要請したところ、最初しぶっていた委員会側は、後日この企画を取り止めたことを伝えてきました。もし、この企画が実施されたらと思うとゾッとします。たばこに市民権を与えてしまうのですから。これも継続して行なった運動の成果と自負しています。





## 四年目 職場と喫煙

### ——タバコと部屋の汚染／こうすればタバコはやめられる

三年続けてタバコの学習会を行なっても、長い間の慣習で許されてきた喫煙のモラルを一挙に変えてゆくのは容易なことではありません。一年に一回は啓蒙の意味も含めて学習会を持っても良いのでは、との常任委員の話し合いで、四度目の学習会を行うことにしました。今回は環境問題とのドッキングと、タバコをやめる具体的な方法を学ぶことにしました。

今回の講師はコザ保健所所長（当時）である伊波恒雄氏と、アドベンチスト・メディカルセンターのチャブレン（病院付牧師）東均牧師から学ぶことにしました。

伊波所長は、「タバコは明らかに環境問題であり、南北問題だ」と問題提起しました。タバコの葉を乾燥させる時、多くの森林が燃やされる——特に発展途上国では。だから、タバコを作るたびに森林が破壊されていく。先進各国でも多量の電力・石油等が消費され、結果的には環境破壊につながる。

そして出来上がった「タバコ」には、ダイオキシンやDDT、PCBなどが含まれ、四十種以上の発ガン物質が含まれているとしたら、放置してはおけぬ問題だ。

また、タバコを作る国、あるいは吸い続ける国の中に、文明の恩恵にも浴せず、栄養失調のため一日万単位で死んでいく多数の乳幼児がいるとしたら、タバコの存在とは何かを

思わざるを得ない。先進工業国のタバコ消費量が減少しているというのに、発展途上国の消費量は増大し続けているという。特に嫌煙運動の盛んなアメリカでは、自国で売れなくなったタバコを、日本、台湾、韓国に輸出させ、次はタイに売ろうとしている。自国で減少している消費量を外国で増大させているのである。二十一世紀の初頭には、低開発国では肺ガンとエイズで死ぬ人が死亡順位のトップになるであろうと言われている。

以上のことから伊波所長はタバコ問題に取り組む戦略として、次のように提言された。

#### 一 法的規制の確立・強化

国、県、市町村各レベルで意志決定できることから実践（分煙・環境保護）

#### 二 子どもたちの喫煙防止・保健教育の強化

#### 三 総合的視野に立った地域保健活動の組織的展開

労働団体、特に婦人の積極的な禁煙・防煙運動への参加の促進など。

東牧師は具体的にタバコをやめる方法を教えてくれましたので、その要約を記してみよう。

#### ★タバコを五日間でやめる方法

一 タバコの害について正しい知識を持つこと——タバコには三千～四千の化学物質が含

まれていて身体に有害。

二 戦友を持つ——禁煙をいっしょに行う友人を持つ。

三 まず五日間を目標にする。

四 減煙法でなく断煙法で行う。スパッとやめる。

五 たとえ一本吸っても、あきらめない。

#### 〔食べ物注意〕

一 食事は腹七分。頭脳を鋭敏にさせるため。満腹になると意志力が衰える。

二 酒、コーヒ―、肉を避ける。香辛料のきいた物もとらない。あっさりしたものを食べる。ビタミンCのたっぷり入った果物、ビタミンB（玄米、黒パン）を。

三 水を飲む。タバコが欲しくなったら水を飲む。

#### 〔ライフ・スタイルを変える〕

一 いつもより十分早く起き、これまでの行動パターンを変化させる。

二 「私はタバコを吸わないようにしよう」と口に出して言ってみる。機会あることと言えば、決意が強まる。

三 起きた時シャワーを浴びる。あるいは冷水摩擦、軽い運動でも良い。ぬるめの風呂にゆっくり入る。

四 タバコが欲しくなったら時計を見ながら、三分間我慢する。ハッカ入りの歯みがきでみがくのも良い。

五 タバコを断つと和食のデリケートな味がわかるようになる。口の中が気持ちよくなり、

人から好かれるようになると思わせる。

六 タバコをやめたらどうなるか（たとえば、タバコ代を積み立てたら家が建てられるなど）をイメージ化する。

以上は、たった五日間やれば良いのです。そしてこれに成功したら、次はこれを長続きさせねばなりません。そのためには次の四つを守って下さい。

- ① 動機を明確にし、目的意識を持つ。
- なぜ禁煙したいのか、その動機を再確認する。
- ② この機会に価値ある投資をしよう。
- ③ タバコを取り除いた分、何か新しいことで埋める。趣味でも良い。奉仕活動、スポーツなど、禁煙したい人に援助の手を差しのべる。
- ④ 体重に気をつける。標準体重を保つよう食事を摂取する。
- ⑤ 禁煙に成功して、取り戻した多くの素晴らしいものを数え上げる。

#### 五年目 ポスターと禁煙グッズで分煙運動

禁煙（分煙）運動を始めて以来五年経った今年は、新しい試みとして大きなポスターを活版印刷で作りました。五月三十一日、世界禁煙デーに間に合わせて作り、各職場内、廊

下、掲示板等に貼りました。このポスターは、国際禁煙デーが過ぎた今も色あざやかに、タバコを吸う人をにらんでいます。禁煙バッジ、ネクタイピンの販売も行ない、三十個が完売されました。

さらに、今年は女性部の独自要求として、分煙の実施のため喫煙室の設置、禁煙デー、禁煙タイムの設定、庁舎内での灰皿撤去を当局に求めています。

終わりに

以上この五年間の女性部の禁煙（分煙運動）の経過を簡単に振り返ってみました。私たちの動きはささやかで、じれったいくらいですが、女性部の中にも、もういいかげんにしたら……、好きなものを止めろというのも無理じゃないの……等、批判する声もないわけではありません。しかし、やはり私は、タバコというのは、単に嗜好の問題で片づけられない人権の問題があると思います。きれいな空気の中で生活したいとは誰しも共通の願いではないでしょうか。思えば、子どもがまだ小さい頃、女性解放の学習会をするといって集まった私たちが、子どもがうるちよろする中で、もうもうとタバコの煙を立てていたという、認識のなかった時代もありました。私はその反省も込めて、そして、特に若い世代が、タバコを吸うことが格好良いと思わないような社会を目指して、これから徹々たる力を出していけたらと願っています。

# 献体、それは最後の置きみやげ

平良玲子

虎は死して皮を留め、人は死して名を残す。と諺にあるが、無名の私に残せる物があるだろうか、とふと考えた時、寂しいかな何もなし。

この先、夫婦して一生懸命働いてみたところで、果たして、どれだけの資産が残せるのか。それは全く皆無であろう。子どものためにとがむしゃらに働き、あげくの果ては「過労死だった」なんてことは絶対に避けたい。

結局、「がむしゃらに働かざる者、財残せず」である。本当に何も残せないのか。

いや！ 待てよ！ 献体があるではないか。死んだ後、役に立てる最も楽な社会貢献である。

ただ横たわり痛みを感じることなく、医学の発展に寄与できる。これこそ「最後の置きみやげ」と自賛。

そして、何よりも魅力なのが、お墓の心配がないこと。結婚したら嫁ぎ先のお墓に入ら

なければならぬ法なんてないはずだ。嫁姑（舅）問題をあの世の果てまで、引きずりたくない。私は一会員として納骨堂（大学構内にある）に納骨してもらいたいと考えている（現在の心境）。その時、夫とは別墓になるが、決して二人とも寂しくはないだろう。解放された先々のこと（あの世）を考えると、現在の諸トラブルなんて「へのかっぱ」である。以上が献体登録（でいご会入会）への単純な動機である。

次に、父の献体意志決定から登録までを記してみたい。

父は、心臓に欠陥があり、自分はいつ死ぬかわからないから早めに登録しなくちゃいかんなあ、と七十歳の時に言っていたが、配偶者の同意が得られず歳月だけが流れてきた。ところが平成三年十二月一日、心臓からくる脳梗塞で緊急入院、六日ほど言語障害と右半身麻痺の状態であった。一時はどうなることかと、不安でならなかった。

私が不安と思ったのは、もし治療の甲斐もなくそのまま息をひきとったらどうなるんだろう、本人の献体意志があった時に登録を済ませとけばよかったなあ、と、不謹慎にも献体のことが頭に浮かんできた（内心、絶対だいたいじょうぶと言いきかせつつ）。幸いにも大事に至らずリハビリで回復し、年の暮れに退院した。

月日は流れ三月十日、七十四歳の誕生日を迎えた父と私は、登録の際に必要な配偶者の同意を得るために、左記のような一芝居を打った。

私　　そういえば、今日はお父さんの誕生日だね。プレゼント何がいい？

父　生まれてこの方、誕生日はおるかプレゼントなんて貰ったことないが……どうせ貰うなら、値打ちのあるのがいいなあ。

私　それなら文子さん（母）に署名してもらったら、同意書に！

父　それは何よりのプレゼントだね！

その時、母は二人の演技力のなさを見抜いて、何かハメられたな！と感じたらしく、しばらく恍けていたが、私が真剣に献体の話をしだすと、怒りで涙声になり、「あんたは、どうしてそんな問題を持つてくるの？」と譲らない態度をみせた。

しかし、私も腹を決め、嫌われついでだと突っ込んだ。

人間って勝手だよね！

人にはお願いするし

人のものは欲しがるし

だけど自分はどうなのか？

人にお願いされるのはイヤ

人にはあげたくない

とにかく自分さえ良ければ……

私　こんな勝手なことばかりやってるから、地球上で戦争が絶えないんだよ！



母 我が家と戦争、何の関係があるの？

と、しばらく喧々こうこうと続いたが、もうあんたの勝手にしなさい！ そのかわり、今日限り献体の話はして欲しくないと、怒りの署名押印となった。

「ありがとう、文子さん」と二人とも心から感謝した。（所要時間、わずか三十分）

先日（七月十一日）、〈でいご会〉総会に二人して出席した。

何名かの挨拶の中で、家族の同意を得ることの難しさや、また当人でさえ決断できずに三年間も引き出しの中で温めた話等を聞いて、うちの家族は理解があるほうだねと、ひそひそ話。

次に全国連合会総会出席者の報告

○他府県では、献体希望者が多く、医学実習の遺体には困らない。

○むしろ、増えた場合の遺体保存が課題となってくる等々と、沖縄県にしてみればうらやましい限りの悩みだなと思えた。

ひと通りの会を終え、自由懇談の中で永田さんという男性（八十歳）の方が、「今年もまた来ました。なかなかお役に立てなくて（遺体提供できないこと）どうもすみません」と場内を沸かせた。

高齢者の方の出席が多く、みなさん明るい方々ばかりだった。年齢を感じさせない若さの秘訣は何だろう！ いついつまでも御達者と祈りたい。

参考までに会員の年齢内訳を記すと、

明治生まれ三十七名（最年長・三十三年生）

大正生まれ九十名

昭和生まれ二百八十二名（最年少四十五歳）

現在会員数四百九名、まだまだ普及活動が必要である。

閉会し、家路を急いだ時の会話。

私 お父さん、今日は出席して正解だったね。昼食の弁当もおいしかったし……。

父 会員だから出席するのは当然だけど、さっきの報告のように遺体があり余って困ると言われてもたいへんだね。それからいうと、我々は、ありがたいがられて幸せだね。遺体が余ったら野積みされかねないからね！

と、ありえない話に笑ってしまった。

最後に一句詠んで結びたい。

『献体は子孫の為の置きみやげ』 合掌



# 凄惨！首里城地下の沖縄戦

琉球新報 32軍司令部壕取材班



沖縄の地元紙には、繰り返し繰り返し「沖縄戦」の真実が掲載されます。ことが6月17日から8月13日まで、『琉球新報』に掲載された『首里城地下の沖縄戦』は、地下壕を掘り、後に「鉄血勤皇隊」として斬込んだ沖縄師範学校生き残り（わずか四二％）の聞き書きを中心に、「人が人でなくなる過程」を、すさまじいまでに描いています。やまと（日本本土）のマスメディアには決して伝えられない貴重な情報を、同紙のご厚意により、三回にわたり連載します。

## プロローグ

### ——沖縄戦悲劇の「震源地」32軍司令部壕

首里の杜（もり）にセミが鳴き始めた。石垣の向こうでは首里城の復元が進んでいる。守礼門では観光客が記念写真を入れ代わり立ち代わり撮っている。平和そのものの風景。そこを行き交う人たち、そして県民のほとんどが知らない。この首里城の下に、沖縄戦悲劇の震源地となった旧日本軍の巨大な第三二軍司令部壕が眠っていることを……

\*

首里城公園を訪れる人たちは多い。本土からの観光客はもちろん、台湾の人たち、さらに米国人の姿も。

円鑑池近くにある沖縄戦で焼けた赤木にアコウが宿った大木がある。バスガイドに引き連れられた観光客が足を止め、沖縄戦の説明に耳を傾ける所だ。

「第三二軍司令部が地下にあったため、激戦になり首里城は焼け落ちてしまいました」。そこから二十メートルほど離れた所には網でふさがれたままのコンクリート施設がある。「ここが司令部地下壕の入り口です」とバスガイド。しかし、ここは第三二軍壕の入り口ではない。このあたりに

あった司令部壕の入り口はすべて埋没しているのだ。

第三二軍司令部は沖縄戦を指揮、その壕はその作戦本部となった。沖縄師範学校の学生二百四十三人も動員され、一九四四年（昭和十九年）十二月から突貫工事で建設、四年五月末に壕を捨て摩文仁に撤退する直前まで作業は続いた。

入り口は六か所あり、縦横に掘られたトンネルの総延長は千数百メートルといわれている。深さは十五メートルから三十五メートル。幅は約四メートル、高さは二メートル余。米軍の嵐のような砲撃にもびくともしなかった。

通路の両側には二、三段のカイコ棚のように兵隊のベツドが並んでいた。台所、浴室、トイレも完備し、食糧も豊富に貯蔵。外とは別世界だった。

あれから四十七年。首里城は復元されつつあるが、第三二軍壕はいまだに遺骨が埋もれたままだ。

石原昌家沖縄国立大教授は、司令部壕の存在の薄さ指摘する。「当時は極秘事項だった。ほとんどの人は戦後になって、あったことを知ったという程度だろう」。

沖縄戦の体験者は年々少なくなっている。「沖縄戦の実相を記録にとどめ、平和教育の場としても保存する意義が

ある。早く手を打つ必要がある」と石原教授。戦後四十七年目の「慰霊の日」が近づいている。

### 沖繩守備の第三二軍創設

——最精鋭部隊は台湾へ。決戦から出血持久戦に転換

「米軍上陸なんて予想もしなかった。しかし、昭和十九年（一九四四）三月に日本軍が駐屯し、ただならぬ雰囲気だなあと感じていた。疎開の話が出てからは大変でした」

当時、沖縄県師範学校二年だった高良吉雄さん（六四）は戦争に突入しようとする沖縄をこう語る。

のどかな沖縄にも暗い戦雲は立ち込めていた。四四年五月から連日二千人以上の県民が動員され各地の飛行場建設が始まった。老若男女、小学生まで駆り出された。四四年八月には、学童疎開船・対馬丸が米潜水艦の魚雷を受け沈没。10・10空襲で那覇は焦土と化した。

10・10空襲の当日、出身地の本部町備瀬に帰省していた高良さんは、二日後、日本軍のトラックで那覇へ戻り、灰じんの街を歩いた。「人の焼けたにおいとか、異様なにおいに悩まされながら首里まで帰りましたよ。危機が迫って

いると感じましたね」

沖縄守備軍の第三二軍が創設されたのは四四年三月二十二日。四二年六月にミッドウェー海戦で大敗したのを契機に戦局が悪化し、南西諸島の防衛は急務となっていた。沖縄戦突入時の第三二軍司令官は牛島満中将。三七年十二月の南京攻略にかかわった経歴がある。

参謀長は長勇少将（四五年三月に中将）。豪傑肌で奇行に富み、多くのエピソードを残している。

続々と到着する部隊。突然、決戦準備を進めていた第三二軍を震撼させる出来事が起きた。十一月に精鋭といわれた第九師団（武部隊）が台湾に転用されることになったのだ。軍の落胆は大きく、絶望的な雰囲気包まれた。

読谷村座喜味出身の照屋正吉さん（六六）は四四年十月、第九師団に入隊し、首里で訓練を繰り返していた。「十二月二十七日、突然夜中に起こされた。隊列を作って那覇港に向かい輸送船に乗った。行く先は教えられなかった」

台湾で壕掘りの毎日を送っているうち照屋さんは米軍の沖縄上陸を知る。「中隊で沖縄出身者が集められ酒を飲みましたよ。沖縄の人間で船を出して応援しようと思ったが、出られないんですよ。武部隊は台湾に避難しに行ったみた

いなものだ」と当時を振り返る。

第九師団を失ったことで三二軍の作戦は根底から覆される。決戦主義から出血持久戦へ――。

### 築城開始――南風原放棄、首里へ

「野ウサギだって自分のすみかを知られないようにするでしょう。軍司令部壕入り口をあんな風にコンクリートの立派な建物にするはずないですよ」。

当時、沖縄師範学校教官だった宮城幸吉さん（八一）は、バスガイドが観光客に司令部壕入り口と説明している円鑑池の近くのコンクリート施設を指した。

「壕の第一坑道口はあそこにあったんです」と、さし示したのは園比屋武御嶽真下の斜面。雑草が生い茂って入り口はすっかり埋没している。そこにはコンクリートで補強されない穴がぼっかり開いていて、地下三十数メートルの本坑道に通じていたという。

「天の巖戸戦闘司令所」と名付けられた第三二軍司令部壕は、一九四四年（昭和十九年）十二月九日に本格着工。第二野戦築城隊が担当した。翌四五年一月初旬から沖縄師範

学校の生徒も陣地構築に動員された。

兵力と火力装備などあらゆる点で劣る第三二軍は、米軍の海と空からの猛攻をしのぐために琉球石灰岩を利用した洞くつ陣地建設を最重視していた。このため四四年七月ごろから南風原町津嘉山に司令部壕を構築していた。

しかし、精銳の第九師団（武部隊）が台湾に移動することになったため、作戦計画の変更と各兵団の再配備を余儀なくされた。司令部も首里に移動することになり、せっかく造った南風原の壕を放棄、新たに首里城地下に司令部壕を構築することになった。

壕掘りが始まったころ、米軍は硫黄島攻撃を開始した。野戦築城隊の兵士たちは「次は沖縄だ」とうわさするようになった。だが、専ら人力に頼る掘削作業は、なかなかいかどらない。硬い岩盤に当たるとするはしの動きも鈍る。学生の作業を監督していた宮城さんは、現場を巡視する牛島司令官の姿をみて、「司令部も気が気ではなかっただろう」と思った。

四五年三月二十三日、米軍の激しい空襲が始まった。上陸は近い。軍司令部は地上から壕内へ移動した。二十四時間態勢で壕掘り作業を続けたにもかかわらず、この時まで

に第一から第三坑道口と金城町側の坑道口を結ぶ本坑道は貫通していなかった。たて坑も完成していない。司令部壕は未完のまま沖繩戦に突入した。

砲弾の中、タコ壺を造った十六歳の「愛国心」

一九四七年（昭和二十二年）三月、第三軍残務整理部がまとめた「沖繩作戦ニ於ケル鉄血勤皇師範隊史実資料」は築城に従事する師範の学生について次のように記録する。「昼夜ヲトハス砲爆撃下ニ作業ニ挺身シ粗食ニ甘ンシ皇國ノ大勝ヲ明日ニ願ッテ十字歟ヲフルイ円匙ヲ取りタル姿涙無キ アタワス」

この、カタカナ交じりのきこえない一文の中に見えるのは、日本軍の勝利を信じ、奮闘する師範生の姿だ。学生たちは三百メートルほど離れた留魂壕から砲弾の中を駆け司令部壕に飛び込み、疲労と空腹でふらふらになるまで働いた。「朝八時か九時ごろ、留魂壕を出て駆け足で司令部壕に入った。カンボー（艦砲射撃）だけがする人もいた」と語るのは予科二年から築城隊に入った上原誠徳さん（六三）。壕を移動するのも命がけだった。

内間武義さん（六四）は空襲が激しくなり、交代相手に一学年上の与那原春孝さんと第五坑道近くにタコ壺を造った。四五年五月十六日朝、そのタコ壺に直撃砲が当たり与那原さんが命を落とした。この日、与那原さんは高熱にうなされ作業ができなかった。内間さんが濡れタオルを与那原さんの額に当て、タコ壺を離れた直後、砲弾が二人を狙った。

「私は泣きながら石や土砂を掘り起こすと、中から黒い手が出てきた。夜、真っ暗やみの中、野の花を持ってきて与那原さんを埋葬した。今でも、あの時のことを思いだすと涙が出る」と内間さんは言葉少なに語る。

学友を失いながらも師範生たちは懸命に壕を掘り続けた。戦争への疑問を感じる余裕はなかった。

第三坑道から反対にある金城町側の坑道まで掘り続けた諸見守康さん（六三）は、「当時は十六歳。今のようには戦争がどうのこうのという考えはなかった。ただ早く仕上げようというだけで、頭の中はからっぽだった」と振り返る。読谷村から師範に入った比嘉房雄さん（六四）も「そのころ戦争に対して何の矛盾も感じませんでしたよ。本当の教育をされないと、何も見えなくなりますよ」と強調する。

「皇国ノ大勝を明日ニ願ッテ」。この文句は、当時の学生の置かれていた境遇、教育の恐ろしさを十分に語っている。

### 猛暑と地下水——困難を極めた坑道作業

「ほぼ間違いないです。このあたりです」——沖繩師範の鉄血勳皇隊として野戦築城隊に配属された渡久山朝章さん（六三）は今年五月、壕掘りに当たった金城町側の坑道口付近を探し当てた。

四十七年ぶりに訪れた場所は、県立芸大（元琉球大女子寮）の南東斜面。ガジュマルの根が岩石を抱き、雑木がうっそうと茂っている。コンクリート三面張りの小川が流れており、近くに沖繩師範学校の自習田があったというが、宅地造成ですっかり様変わりしていた。

四十七前と同じように降りしきる雨の中、みじろぎもせずに立ち尽くす渡久山さん。当時の記憶がだんだんよみがえってきた。

「兵隊がつるはしで掘り進むと、私たち学生がシャベルで土をすくってトロッコに積み込み、洞くつの外に捨てたんです。坑道内は天井などから流れ落ちた水で足首がつか

ほどだった。足はふやけるし、ずぶぬれになるし。おまけに坑道内は蒸し暑く、兵隊もふんどし姿で作業していた」

米軍上陸時までに完成しなかった、たて坑工事は、戦争突入後、爆撃や機銃掃射にさらされながら急ピッチで進められた。たて坑は首里城木曳（こびき）門に向かって右側、城壁の手前から掘り進んで本坑道につながる。

那覇港沖、慶伊瀬島（チービシ）の砲台から撃ちこまれた砲弾が城壁に直撃、城壁に沿って積み上げられた火薬が燃え出したことがあった。爆風に吹き飛ばされ、作業中の兵士と学生がたて坑内に落ちて死傷者が出た。

坑道作業も困難を極めた。城西小学校側の第二、第三坑道は第一坑道と合流して本道となった後、第四坑道へ分かれる。本道はさらに金城町側に伸びて第五坑道と接続する。特に第五坑道へつながる下り斜面の工事現場はガスがたまり、ろうそくの火が消えるほど空気が薄かった。

「本道側の作業班は窒息しないように、ロープで下に降ろすと二、三回つるはしでかき起こし、すぐ引き上げた。次にモッコを持った学生が降りてゆき、大急ぎで土を入れて引き上げた。この繰り返しだった」。師範の教官で、野戦築城隊第三中隊にいた宮城幸吉さん（八一）が難工事を振



り返る。

「貫通したのは四月の末あたりかな。貫通式をやって喜び合った」と上原誠徳さん（六三）。豊里安陸さん（六三）も、「ちょうど貫通した時に私もその場所にいた。感激した」と語った。

### 留魂壕

——師範生の安らぎの場 近くでも戦死者が

首里城内の物見台の下に民間人が入っている小さな洞くつがあった。それを囲む形で沖繩師範の学生が、自らの壕として掘ったのが留魂壕だ。

留魂壕を設計したのは、学生の一人、富村盛輝さん（六七）。縮尺図を見ながら、坑木から糸を三本下げてゆがみはないか、確認しながら掘り進められた。「一日に二、三十センチしか進まないこともあった」という。

川崎正剛さん（六四）は、「一か月ぐらいで出来た。昭和二十年三月二十日ごろ完成したと思う」と記憶をたどる。

掘る時は、壕の内と外で軍歌や寮歌を合唱。「鬼畜米英撃滅を期して燃えに燃えていた」と川崎さん。沖繩新報が、

『陣中新聞』を発行した留魂壕の隣の壕も学生たちが掘ったものだ。

教官は学校から持ち込んだ畳を敷き、学生はアカギの枝などを地面に敷きつめていた。「二百人ぐらいは入れた」と富村さん。築城隊の学生はそこから三百メートルほど離れた三三軍の壕掘りに通っていた。しかし、三百八十六人の学生がおり、八時間ずつの三交代だと三分の二は壕に残ることになる。教官だった宮城幸吉さん（八一）は「とても入り切れないので、壕掘りは十二時間ずつの二交代になった」と説明する。

学生の多くは来る日も来る日も三三軍の壕掘りに明け暮れたが、十六、七歳の学生にとって、留魂壕は仲間と唯一息を抜ける場所だった。

諸見守康さん（六三）は振り返る。「留魂壕に帰ってシラミの競争をさせるのが楽しかった」

そのささやかな楽しみもやがて奪われてしまう。米軍の上陸後は、死と隣り合わせの恐怖感が学生たちを襲う。

四月に入って間もなく、久場良雄さん（本島中部出身）が沖繩師範最初の犠牲者となる。「留魂壕の前でカンボー（艦砲射撃）で片足を失った。初めて血を見てみんな右往

左往していた」（富村さん）。

軍医が手当をし、友人らは久場さんのために祈った。しかし、久場さんは出血多量で息を引き取った。その後も仲間が次々と銃弾に倒れ、亡くなってから二等兵から上等兵に二階級特進したが、学友の胸にはむなしさだけが残った。

従軍慰安婦に女スパイ容疑者を刺させる

「ずっと、言えないでいることがあるんです。豊見城出身の上原トミさんのことです」鉄血勳皇隊員だった弁護士川崎正剛さん（六四）は表情を曇らせた。話すことを決心するまでに五十年近い歳月を必要とした。

一九四五年（昭和二十年）五月のある日。辺りは薄暗くなりかけていた。三三軍の第六坑道口に、一人の女性が憲兵に引き連れられてきた。それが「上原トミさん」だった。三十歳ぐらい。半そで、半ズボンの軍服姿。頭は丸刈り。「スパイをしたら上原トミのようになるぞ」——この憲兵の発した名前が、川崎さんの頭に焼きついた。

「スパイをこれから処刑する」と憲兵。沖縄師範学校の田んぼの中、坑口から二十メートルほど離れた電柱にトミさ

んはひざまづいた姿勢で縛り付けられた。壕内にいた朝鮮人従軍慰安婦が四、五人、日の丸の鉢巻きを締めてトミさんの前に立った。手には四十センチの銃剣が光っている。

慰安婦が憲兵の「次」「次」との命令で代わる代わる銃剣をトミさんに突き刺した。憲兵は次に、縄を切ってトミさんを座らせた。「少尉か中尉だった。おれは剣術は下手なんだがな」と言って、日本刀を抜いた」（川崎さん）。その軍人はトミさんの背後に立ち、刀を上段から振り下ろした。ふた振り目に首が切り落とされた。

その時だ。周りで見ていた兵隊や鉄血勳皇隊の何人かが駆け寄り、土の塊や石をトミさんに投げつけた。人間が人間でなくなる。戦争の渦の真ただ中に巻き込まれ、学友を失った者たちは「おまえのために」とトミさんの遺体に襲いかかってしまったのだ。

「申し訳ないことをしてしまった」。自責の念は消えない。川崎さんは戦後十四、五年して現場を訪れ、手を合わせた。「トミさんの最後を見た者として、事件を明らかにしなければならぬ」。当時の沖縄のあの状況の中でスパイなんてあるわけがない。二十年余り、トミさんのことを書くこうとするが「胸が苦しくなって」ついに書けないでいた。

「慰霊の日」を前に今年、川崎さんは再び金城町の現場でトミさんが埋葬されていると思われる所に向かい、一心に手を合わせた。川崎さんの心の中の沖縄戦はいまだ終わらない。

### 首里城焼失

一九四五年（昭和二十年）四月、首里城が燃え上がった。米軍は最後まで貴重な文化財である首里城への攻撃をためらったというが、三三軍が首里城地下の壕に潜んでいるため、ついに攻撃の対象になってしまった。

県民にとってはかなり衝撃的なことには違いなかった。が、人によって反応はさまざまだった。人が次々死んでいく状況の中、「それどころではない」という気持ちも中にはあった。

「四月二十日ごろだったと思う」川崎正剛さん（六四）は振り返る。「バリバリと音を立てて燃えていた。夜が明け行ってみたら燃えかすがなくすぶっていた」

子どものころから首里城を庭のようにして遊んだ川崎さんだったが、「当時は宝物が焼けた——という感覚はなか

った。学友が次々と銃弾に倒れており、感傷なんてなかった」

豊里安隆さん（六三）は火勢が収まってから無惨な首里城を見た。「大きな柱が何本もくすぶっていたのが印象に残っている。爆撃機が飛んでいる中だったので、自分の命のほうが大事。首里城が燃えているな——ぐらいの思いだった」

しかし、豊里さんは留魂壕に戻ってからじわじわと心が締めつけられるような感覚に襲われる。「何とも言えない気持ちになり、急に落胆したのを覚えている」。

諸見守康さん（六三）は、首里城が燃え上がった時、三三軍司令部の壕掘りから戻り留魂壕で眠っていたという。「焼けているぞーとの声で目が覚めた。伝統が焼ける。何ともいえない気持ちだった。付近の住民も何人か出てきてしばらく立ち尽くしていた。砲撃が始まって離れたが……」

それまでも首里城は三度焼失した。が、城壁が崩れ、草木が焼き尽くされるほど、跡形もなく破壊されたのは初めてのこと。一七二二年から一七一五年にかけて三度目の再建がなされ、沖縄の歴史と文化の象徴として県民に親し

まれてきた首里城は、戦争という愚かな行為によってもろくも消え去ってしまった。

### 「朝鮮ピー」と「女雇用人」

野原広信さん（六三）は「朝鮮ピー」と呼ばれていた女性らが一升ビンに詰まった玄米を棒でついている姿を目撃している。「ピー」と言ってからかう日本兵にくっつかかる女性を見た人もいる。

連日連夜の司令部壕掘り作業でへとへとになっている野原さんに彼女らは「仕事、ゆっくりしなさい」と優しく声をかけた。中には、かまぼこの缶詰を差し出した女性もいた。「郷里にいる弟を思い出したのだろうか。とてもありがたくて、四、五人で分けて大事に食べた。あの時の親切が忘れられない」

一方、諸見守康さん（六三）は辻町の女性たちが参謀の部屋にいるという話を聞いたことがある。「時々見かけた。香水のおいがして、もんぺ姿ではあったがきれいな服を着ていた。戦争中にこんなきれいな人が」と驚いた。

蒸し暑い壕内。「昼食時に中将の周りに女性が集まり、

扇をあおいでいた」と上原誠徳さん（六三）は証言する。

「兵は住民を守るはずなのに、自分の島は自分で守れと言って日本兵は沖縄人をばかにしていた」。軍の指揮官の姿を見て、怒りがこみ上げてきた。

渡久山朝章さん（六三）は、ふんどし姿の兵隊たちの横で、シャベルを使って土をすくう女性数人の姿を見てぼう然とした。奈良県から来たという女性もいた。兵隊に体に触れられ、好色な視線とひわいな言葉にさらされながらも無口で重労働に耐えていたという。

三三軍司令部の「日々命令綴」の壕内の配置図に「女雇用人」と記された場所がある。この文書には「女子雇用人入浴時間割出表」があり、女性の入浴時間を細かく定めている。米軍作成地図は、第五坑道口から八十五メートル入った地点に女性の部屋があったことを記録。日本人女性十二人、沖縄女性十人と記している。

いよいよ司令部壕を放棄し本島南部へ移動する晩、高良吉雄さん（六四）は朝鮮人女性に「私のからだをあなたにあげますから、一緒に連れて行って」と声を掛けられた。連れて行くわけにはいかなかったが、その女性の必死の懇願を断りきれなかった。とっさに「七時半ごろ撤退するか

ら」と自分の部隊の撤退時間を偽って、その場を切り抜けた。

司令部壕放棄後、壕内の朝鮮人女性らの足どりはさだかでない。砲弾にさらされながら、雨でぬかるんだ南部の激戦地をさまよう朝鮮人女性らの姿を野原広信さんが確認している。

気概を失った軍司令部——10・10空襲前夜に宴会

陸上自衛隊幹部学校の『32Aを中心とする、日本軍の作戦』は三三軍の作戦方針として「敵主力が我の放棄した中頭地区沿岸から上陸後南下する場合においては、首里北側地区の堅固な地形を利用して持久戦略をとる」ことを明かしている。

何のための「持久戦」なのか。その目的は、できる限り沖縄で米軍を押しとどめて時間を稼ぎ、本土防衛態勢をつくるということにはかならない。沖縄は捨て石でしかなかったのだ。

大本営によって精鋭の武部隊が台湾へ引き抜かれ、三三軍にとっては「持久戦」しかなかったともいえる。天皇直

属の統帥部である大本営にとって、沖縄は、どうでもいい状況で、沖縄住民の命を守るということは二の次だった。

三三軍兵士の士気も沈滞していた。

武部隊が台湾へ行く二か月前の一九四四年十月十日、空襲が那覇の街を焼いた。当時、首里第二国民学校一年だった堀川恭雄さん（五四）は、その模様を首里城近くから見ていた。

「グラマンが首里城上空を旋回し、かなりの数が那覇の爆撃に向かっていった。操縦士の顔まで見えた。鉄砲で撃って当たると距離だったんだが……。兵隊は隠れて見ていた」。兵隊の中には間近の敵機に戦意を喪失している者もいたらしい。

この日、那覇を中心に沖縄は朝七時ごろから夕方まで五回の空襲に見舞われた。米軍の記録によると、投入された航空機は千三百九十六機、投下された爆弾が五百四十一トン、ロケット弾六百五十二発。この猛烈な爆撃で那覇は九〇％が焼失。沖縄全域で住民と兵隊合わせて約六百人が死亡、約九百人がけがをした。

球部隊獣医部に属し、牛島満司令官の馬の世話をしていた玉城正清さん（七五）は10・10空襲の際、牛島司令官の

漏らした言葉を覚えている。「いよいよ来たね」。あっさりしたものだ。

沖縄守備隊第三二軍司令部の最高責任者がこれだ。しかも、その前日の九日夜には「全軍の兵団長、独立団隊長らの招宴が（辻の）沖縄ホテルで賑（にぎ）やかに開催された。その宴会のあと、軍参謀全員で市内の料亭で二次会をやった」（八原博通著『沖縄決戦』）沖縄防衛の気概は、そこには少しも感じられなかったという。

### 焦り、恐怖、絶望感の中の反攻と持久戦

一九四五年（昭和二十年）四月一日、米軍は沖縄本島に上陸、南へと突き進む。三二軍の将兵約八万六千四百人に對し、米第一〇軍は將兵約二十三万八千七百人。縦横に展開する米軍に對し、三二軍は洞くつ生活。焦り、恐怖、絶望感が漂った。

攻勢を求める大本営や第一〇方面軍と、あくまで「持久戦」を主張した三二軍との間で作戦をめぐる意見が対立。大本営などの意向をくんで起死回生をかけた攻勢に出ては被害が拡大、また持久戦に戻る——というような状況を繰り返した。

返した。

鉄血勳皇隊員だった知念清さん（六七）は言う。「何度か決戦作戦が決行されたが、劣勢はばん回でできなかった。日本軍の特攻、夜襲など必死の反撃もむなしく、文字どおりなすすべもなく、敗退に次ぐ敗退を余儀なくされた」

五月四日、三二軍は、最大の反撃に打って出た。県出身将校としてただ一人三二軍司令部にいた安谷屋謙さん（六七）は「首里城の防衛線を死守するというのが方針で、反撃した時にはだいぶ樂觀していた。しかし、実際には石部隊は八分どおりやられ、山部隊はほとんど使えない状態だった」と言う。

敗色濃厚な三二軍は、作戦会議にも自然と緊迫感が漂い、野戦築城隊として、壕掘りに従事した沖縄師範学校の学生らにもそれはひしひしと伝わる。

ある日、三二軍司令部壕内の作戦室前の通路は左右二十メートルが通行止めにされ、作戦会議が開かれていた。築城隊の作業監督で近くにいた宮城幸吉さん（八一）は振り返る。

「石部隊が壊滅状態になった時だから五月ごろ。朝十時ごろから夜の九時ごろまで会議は続いた。その後、夜十時こ

ろになってもう一つの作戦室で一人の大尉が大声で各部隊に電話で命令伝達しているのが聞こえた。『何部隊は安波茶へ』『何部隊は幸地棚原へ』『何部隊が通過する橋は明日午前何時までに何部隊が修理しておくからその後に移動せよ』と、約四十分にわたってわれわれにもはつきり聞こえる声だった」

米軍にどんどん追い詰められ、窮地に立たされた三三軍の姿が垣間見える。

悪臭と暑さ、湿気の中、米俵を寝台に

第三三軍司令部壕の生活は、暑さと湿気と悪臭との闘いだった。司令部壕内の営みを知る人は、そのうだるような暑さ、蒸し返すような湿気、腐敗物から発生する異様なにおいを必ず口にする。

当時、沖縄新報記者として司令部壕に出入りした牧港篤三さん（八〇）はこの暑さや湿気を「雲気や熱気がしずくになって漂っているような感じだった」とたとえる。「めがねは曇りっぱなし。たばこに火をつけようにもマッチの先がボロボロになった」

この、耐え難い熱気、湿気は、三三軍首脳、兵士、学生を平等に襲う。

兵士や学生は通気口から外に顔を出し、新鮮な空気を求めた。暑さを少しでもやわらげようとふんどし一つになる兵士もいた。

長参謀長が裸になり、女性に扇であおがせているのを見た師範隊は多い。また牧港さんは「風袋（布を円筒状に縫い合わせたもの）を坑道口から参謀室まで延ばし、長参謀長が袋口に顔を突っ込んで呼吸しているのを見た」と話す。

壕内の規則を定めた「天ノ巖戸戦闘司令部取締二関スル規定」によると、司令部壕の食事は午前八時、午後一時、九時の三回。食糧は豊富で、坑道には米俵がずらりと並べられ、兵士の寝台代わりにもなった。

食事は缶詰を調理したもので「けっこう、おいしいものが出ていた」と牧港さんは回想する。しかし壕構築に汗を流す学生の食事は日に二回。貧しい食事で空腹をしのいだ。築城隊にいた諸見守康さん（六三）は悔しがる。「食糧が野積みされていたのに、われわれは食事に不自由した。ただただ飯を腹いっぱい食べたかった」

炊事場は第五坑道口付近にあり、近くを流れる小川から

水をくみ、飯を炊いた。ところが、せっかく炊いた飯も壕内の熱気で腐ってしまい、炊き直すこともあったという。

五月中旬から激しい雨が首里をたたき、壕の天井から滴り落ちる雨水で、地面は水びたしになった。その水が兵士の汗のしみた米俵にしみ込んだ。壕内の熱気にあおられ、俵の米は間もなく酸酵した。

「臭くて、しょうがなかった」と牧港さんは振り返る。

### 沖縄語を使うと、即スパイ容疑

司令部壕内の諸規則を定めた「天の巖戸戦闘司令所取締二関スル規定」は、一九四五年五月五日、長勇参謀長名で出されたものだ。

この規定に見られるのは、沖縄の一般住民に対する警戒心だ。

「軍人軍属ヲ問フズ標準語以外ノ使用ヲ禁ズ」（沖縄語ヲ以テ談話シアルモノハ間諜ト見ナシ処分ス）

方言を使う者はスパイ——この沖縄住民観が、後に「スパイ虐殺」という悲劇を起こす。師範隊の学生たちも方言を使うと兵士ににらまれるのであえて使わなかったという。

壕内の秩序を保ち、兵士の士気低下を防ぐために作られた規定。しかし、戦況の悪化が著しくなるにつれ、規定の効力はなくなっていた。

沖縄新報の記者として司令部壕を見た牧港篤三さん（八〇）は「兵隊たちはみんな勝手にやっていた。朝から晩まで読経を続ける人もいた」と話す。

規定は衛生面にも細かく配慮していたが、激しい艦砲射撃で坑道口にあるトイレにも行けず、いたるところに汚物が散らばり、悪臭を放った。

兵士の気持ちも揺らいでいた。師範隊築城隊にいた高良吉雄さん（六四）は首里放棄直前の五月二十五日ごろ、ふんどし姿になり坑道に並べられた米俵の上で寝をべる兵士の会話を聞いた。「兵隊たちは、このまま沖縄で死ぬのかなあ、と悲壮な話をしたり故郷の話をしていた」。

同じ築城隊の内間武義さん（六四）も異郷の地で死を見つめる兵士の姿を見た。

「学徒隊の皆さん、頑張れと激励したり、こんな川がありフナが釣れるとか、野山を駆け回ったとか、ふるさとの話をする兵隊が多かった。不安だったんでしょね。時々、ふるさとのがよぎるんですよ」



こんな兵士たちを、あんなの筒の中で鈍く光る電球が、頭上から照らしていた。筒には、「撃ちてし止まん」「砲側墓場」という勇ましい言葉が並んでいる。坑道沿いに一列に光る電球。牧港さんによると、それは、まるで祭りの出店のようだったという。

三百八十六人中、二百二十四人が戦死

米軍が沖繩本島に迫った一九四五年（昭和二十年）三月三十一日夕、首里城内に掘られた留魂壕の前で沖繩師範学校の卒業式、修了式が行われた。野田貞雄校長が「全員進級、全員卒業を認む」と認定。式は一、二分で終わった。

直ちに入隊式に移り、三三軍司令部の駒場少佐が「沖繩師範学校の職員、生徒は鉄血勤皇師範隊として防衛招集された。敵の上陸は目前に迫っている。諸君は全力を傾注し、国土を防衛しなければならない」と訓示。鉄血勤皇沖繩師範隊が編成された。

職員、学生三百八十六人は、第三三軍司令部勤皇隊本部（十六人）、千早隊（二十二人）、斬込隊（五十七人）、特別編成中隊（四十八人）、第二野戦築城隊（二百四十三

人）に振り分けられた。学生は全員二等兵となった。

「どうにかして、逃げてでも、彼らの命が助かる方法はないか」——沖繩師範学校教員だった宮城幸吉さん（八二）は胸を締めつけられるような思いで、教え子に真つさらな軍服が手渡されていくのを見守っていた。

監督官として学生の壕掘りに立ち会ってきた宮城さんは「お国のために」と懸命に働く学生の姿が頭から離れなかったのだ。

「築城は学生たちのやるままにさせていた。特に指示もしなかった。私が何も言わなくても命がけでやっていた。一人もズルをする者はいなかった。それだからこそ余計に心配になった」

学生には、軍国主義教育が骨の髄までしみ込んでいた。軍服の大きさが合わず、ブカブカの者もいたが、全員国土防衛に燃えていた。

「これで国のために尽くせる」。斬込隊に配属された知念清さん（六七）は、まず、そう思ったという。「みんなそうだったと思う。恐怖感もあったが、当時の教育がそうだった。軍国主義教育が五体すみずみまでいきわたっていたから……」

それぞれの任務に従い、ある者は命令を携えて前線突破を図り、ある者は敵陣地に切り込んで行った。そして三百八十六人のうち、実に二百二十四人が戦死していった。

早く死んだほうがラクになれる

第三二軍司令部壕に駆け付けた鉄血勳皇沖繩師範隊斬込隊の面々を大本営から派遣されたゲリラ戦の専門家である広瀬大尉はじろっと見回した。隊員は直立不動で聞き入った。一九四五年（昭和二十年）五月二十七日夕方のことだ。

「きさまたちは喜んで死ぬるか。軍は戦略持久態勢を堅持し、敵に出血を強要するため摩文仁へ移動する。斬込隊は南部各地に展開し、敵地に潜入し後方をかく乱せよ」。広瀬大尉の声に続き、「はい」とこたえる隊員の声が洞くつ内に響きわたった。

鉄血勳皇隊編成後、斬込隊はいつでも出動できるように待機していたが、その機会はなかった。第三二軍としては作戦を組み立てて命令を下そうにも、米軍が首里に迫っており、身動きが取れない状態だった。

「いかだに爆薬を載せ、与那原から金武まで泳いで押して

行け」――。五月半ば、金城福一郎さん（六八）らはこう命令を受けた。「敵の後方から遊撃戦を展開せよ」というのだ。既に米軍は首里城周辺の石嶺まで来ていた。この作戦も中止された。

斬込隊の装備は黄色火薬を十キロほどと導火索（線）、導爆索（線）。金城さんは「敵陣地にこっそり接近し、導爆索で取り囲むように張りめぐらせ、所々に導火索をつけて爆破し、敵が右往左往するところを切り込むというのが任務だった。しかし、実行されなかった」という。

五月二十七日の「南下命令」が、実行に移された最初の組織的行動だった。斬込隊五十七人は南部に向けて歩を進めた。首里城は敵に包囲されており、突破口は識名と一日橋を結ぶ道だけだった。

知念清さん（六七）の分隊は十二、三人だったというが、首里を出てすぐ、敵の砲弾が近くで大きく裂し、城田栄さん（糸満出身）が足をやられた。そして高嶺村（現糸満市）大里でほとんどの仲間が倒れていった。他の分隊も同じような運命をたどり、五十七人のうち生き残ったのは八人だけ。

知念さんは言う。「死んだ学友たちがうらやましかった。

どうせ命はない、死ぬものだと思っていたから……。早く逝ったほうが楽になれるという思いのほうが強かった」

### 学徒で構成された情報宣伝隊

鉄血勤皇師範隊の情報宣伝隊・千早（ちはや）隊にいた富村盛輝さん（六七）の手元に一冊の名簿が残っている。

「沖縄師範学校男子部生徒状況」。一九四六年六月、師範学校の職員らの提案で、沖縄文政学校に在籍していた元師範生らが作成したものだ。

すっかり黄ばんでボロボロになった名簿に記された二十二人の千早隊の隊員の名を、富村さんは指でたどる。「四十七年も前のことですが、名簿を見るとあのころのことが思い出せるんですよ」

隊員は師範生の本科一、三年の中でも文才、弁才に秀でた優等生や、級長、副級長の経験者が選ばれたという。第三三二軍残務整理部の残した師範隊の記録によれば、千早隊の選考基準は「思想堅固」。つまり、いっばしの軍国少年である。

「入隊式の時、われわれが真っ先に編成された。全体の中

から選ばれたんだという誇りを感じましたね」と同じく千早隊に入隊した仲田清栄さん（六七）は振り返る。

千早隊の任務は第三三軍情報部の指揮の下、戦火を逃れ壕に身を寄せる住民に戦況を報告しデマに惑わされないよう指導することだった。また、壕内で発行される沖縄新報を配布するのも千早隊だった。

仲田さんは、「最終的な役目は地下工作、スパイ活動のようなものです。戦争の状態を伝え、軍と住民の情報伝達を図ることが任務です」とその任務を説明する。と、同時に「敵の戦況」を伝え、住民を励ますのも大事な任務。

「敵はいつもビクビクして逃げ回っていると話し、壕の住民を励ますのです」と富村さんは証言する。

二十二人の隊員は二、三人の班に分かれ、司令部壕情報部で受けた戦況を携え、首里、南部の壕を回る。当初は中部も活動範囲に入っていたが、米軍上陸でその範囲が狭まったという。

砲弾の間を縫って壕から壕へ。命からがら壕に飛び込み「頑張ってください。戦争は絶対勝ちますから」と住民を励ます。千早隊員は本当に勝つと信じていた。「情報を確実に伝達する気持ちが先走って、戦況の内容に反論する余

裕はなかった」と仲田さんは語る。

### 住民の重要な情報源として大歓迎された

第三軍情報部を指揮し、千早隊に戦況を伝えたのは情報参謀の桑丸兼教少佐と益永重（ただす）中尉。千早隊は、主に益永中尉の指示を受け、各地の壕で活動した。

「軍人という感じはなく学者タイプで温厚な人だった。でも、芯の強い人で、厳しい目つきをしていた」というのが富村盛輝さん（六七）の益永像。仲田清栄さん（六七）も「悪い印象はなく人間的にもいい感じだった」と語る。

千早隊は、住民の壕で大歓迎を受け食糧をもらうこともあった。そういう千早隊は、ほかの師範隊員のせん望的になった。と同時に、偵察機に追われ、砲弾の雨にさらされる存在でもあった。

確たる情報を得られず、不安な日々を送る住民にとって千早隊は大切な情報源となった。不安にかられ、住民も千早隊に疑問をぶつけた。「戦争は勝つんですか」「軍艦を沈めたというのは本当か」。そんな住民の不安を打ち消すために千早隊は懸命に語りかけ「戦争は勝ちます。最後まで

で協力してください」と励ました。

しかし戦況は悪化の一途をたどった。千早隊もそのことは肌で感じるようになった。「司令部壕は、みんな右往左往して何となく浮き足立っている感じだった」と富村さん。「でも負けていることは隠して、敵の飛行機はいくつ落ちた、軍艦はいくつ沈んだと、勝っていることだけを伝えた。味方が、何人死んだという情報は伝えられなかった」

そして、南部撤退。千早隊のだけれど「この戦争は負けるんじゃないか」と思い始めていた。そのころには、壕巡りもなくなっていた。

南部に下がった千早隊は、ある者は倒れ、ある者は捕虜になり、ある者は米軍の投降勧告に応じないで九月末まで身を隠し、戦況の変化を待った。

千早隊二十二人のうち、戦死したのは九人。常に危険を冒してきた千早隊だが、戦死率は四〇・九％とほかの隊に比べて低い（全体では五八％）。それについて仲田さんはこう説明する。「常に外に出ているから弾にも慣れていた。それに、戦況を知っていたから、生き残った人も多かったんじゃないだろうか」

危険であるがゆえに戦争を知り、生き残った。皮肉でも

あり、悲劇でもある。

### 視界いっばいに米艦隊——監視所にも生徒が

一九四五年（昭和二十年）五月初旬、那覇市安謝付近に集まっていた米軍艦船に日本軍特攻機が命中した。火柱を上げて沈没する軍艦を三二軍司令部監視所から見ていた瀬底正賢さん（六三）は、兵士らとともに小躍りして喜んだ。

瀬底さんは県立水産学校の鉄血動皇隊員として四五年四月一日付で第三二軍情報部通信隊に配属されていた。同校で通信隊に配属されたのは二十二人。四五年三月から宜野湾村（当時）の農民道場で有線通信の訓練を受けていた。

有線の通信隊は学生三、四人に下士官一人、兵士一人で一つの班をつくり、二十四時間態勢で監視任務に就いた。

監視所は一カ所で首里城城壁の上にあった。下士官らが米軍艦船や戦闘機の数と進路、砲弾の着弾地点などを確認し、学生が肩に担いでいる携帯用の送信機を使って司令部壕内の有線通信所へ報告する。

その日も、司令部壕のたて坑を登って地上の監視所へたどり着き任務に就いていた。「視界いっばいに米軍艦船が

停泊していたので沖繩はもうだめだろうと思った。特攻機は二、三日おきに来るが、途中で撃ち落とされてばかり。初めて特攻が成功したのを見て、すかっとした」という。

特攻成功以後、米軍は防空網を強化したため、特攻はほとんど成功しなかった。米軍戦闘機グラマンに追われて牧港方面に着陸しようとした日本軍機を目撃したこともあった。「体当たりもしないで、逃げるのはひきょうだ」と憤慨して、有線通信所に即、報告した。しかし報告を聞いた上官に「バカヤロー。そんなことまで報告しなくていい」と怒鳴られた。

監視任務で一番つらいのは、住民が犠牲になる瞬間を目撃することだった。いつものように安謝方面を監視していると、工場近くに砲弾がさく裂。硝煙が消えるとすっきり地形が変わり、今までそこで動いていた人影が消えていた。

一トン爆弾もしのぐ強度を誇った司令部壕と違い砲撃にさらされる監視任務は死と隣り合わせ。監視を終えて司令部壕にたどりつくと「まだ生きていた」と生を確認し合った。奇跡的に監視所で戦死した者はいなかった。「監視所は首里城内にあっただけに、沖繩の人間は琉球の先祖が守って下さったのだらう」と瀬底さんは感謝する。（つづく）

## 二十四年間新聞配達

——だから悪いことはしない



広島県選挙区初の女性国会議員・栗原君子さん

ききて 斎藤千代

◆おめでとうございます。すばらしい選挙だったんですね。広島の方々から刻々情報が入って、ご当選が確定した時は、私まで涙が出てしまいました。

それにしても、突然のご出馬、たいへんだったでしょう。

♥社会党県本部では、去年から独自候補を擁立しようとしていたのですが、今年になって中央本部から「自民を負かすためには連合を」という指示があり、ずっとくすぶっていたのです。指示に従ってあきらめようということになりましたが、「市民が出すなら応援をさせてもらう」という話でした。

六月十五日、PKO法案が成立、連合から出る小西さんが、よりによって民社。掃海艇派遣の時は湾岸まで飛んでエールをおくったというPKO支持派なんですね。広島は二議席あるのに困るじゃないかという話が出、市民の方々も動き出しました。一、二、いい話もまとまりかけたので

すが、まとまったと思うとどこからか洩れてつぶされる…。◆そのへんも広島から刻々情報が入って、私たちもハラハラドキドキし続けでした。『あごろ』175号に畠山さんがビッグニュースとして、「流れを変える新人が、ついに立つ決意を下さった」と報告しておられるのは、その、つぶされた方です。

♥それが結局つぶれて、私の話が浮上したらしいのですが、私については、とにかくつぶされないように深く深く地にもぐって……。苦心されたようです。私の所に話 came のは六月二十五日。二十六日朝、突然、つれあいに話しましたら、怒りましたね。突然だもの、そりゃ怒りますわね、誰でも。

◆離婚という話まで出たそうですね。

♥そうです。はっきりそう言われましたよ。でも、「離婚は後からでもできるけど、この話は今行かにゃ」と言っ

家を出て、そのままホテル泊まり。

◆お帰りにならなかったの？

♥帰らなかつたです。帰ったら怒られるから(笑)。マスコミもすこかつたし、気持ちが変わるといけないので。

◆とっさの間に、よく決心なさいましたね。

♥もちろん迷いはたくさんありました。町会議員を五期十七年、去年が五期目で当選したばかりですから、一年で投げ出すのは……と。熊野町は広島では珍しい革新町政。町長が、日本一の福祉の町にすると言って頑張ってるんですが、議会は町長支持派と反対派が常にせり合っているんです。二十人中、議長を除くと十対九、町長支持派が一人だけ多い。私がのくと九対九になる。来年は町長選、二期目の大事な選挙なんです。

◆熊野と言えば毛筆の産地として有名なところ。三十年くらい前に行ったことがあります、広島から車でずいぶん走った山の中の小さな町、という記憶があります。そういう町では、ご家庭のことも含めてほんとにたいへんだったでしょうね。

♥たいへんでした。でも、それは開き直って。

広島県内では女性たちを中心に「八の日行動」と言って毎月八日に、夫や息子や恋人を戦場に送らないという運動を続けています。今度のPKO法案は、どうしても許せな

い、自分がきちつとしなければ、広島で立ち上がらなくては全国の平和を愛する皆さんに申し訳ない。被爆者援護法も制定されていないのに、強制連行も従軍慰安婦の問題も何一つ解決されていないのに、次の戦争の準備なんです。「あやまちは再び繰り返しません」と言い続けている。憲法があったからこそ、その誓いは守ることができました。その憲法が危ない！

広島には修学旅行生がいっぱい来る。被爆者たちは被爆の体験を語り続けています。森滝先生を中心に原水禁運動をはじめ「中曽根句碑を取り除け」やら、すごい運動がいっぱいある。行政レベルでも国際平和会議が持たれたり。その広島で黙っておくわけにはいかない。二十六日に立候補することを表明しました。

◆その間ずっとホテル泊まりで？

♥そうです。二十七日の朝、やっと電話しました。つれあいはカンカン。離婚届に判をつきかけてた。

「いま帰られやせん、忙しいけ。選挙が終わってから判はつけけ」と言っ、電話を切りました。二十八日の夕方、帰りました。

その間にテレビのニュースが流れたり、新聞にも大きく出た。つれあいが「こまでくりや観念する。熊野のことはワシがやるけ、心配せんでええ」と、やっと……。

帰って見たら、三人の子どもが全部揃ってる。二十六歳の長男は神奈川から、二十四歳の次男は小倉から二十歳の娘は呉から駆けつけた。「離婚するけ、今生の別れに写真を撮ろう」と（笑）。「離婚しやせんから」と言うたら、次の日、みんな帰りました（笑）。選挙戦になったら、職場の休みをとって、時間さいて来てくれましたけど。

◆ドラマになりそう（笑）。

♥今から誰が出て泡沫候補、共産党より負けるだろう、十万票そこそこと、みんな言っていました。ふたをあけたら二十五万ちょっと。八千八百の差で勝ちました。郡部で票を出してもらったのが助かりました。（瀬戸内）沿岸は造船、鉄鋼、自動車、みんな大企業ですから。

県本部の副委員長、組織部長、（日本）婦人会議の県本部長をやったり、県内を歩かしてもらったのが役に立ったのかもしれませんが。でも知名度はなかったです。一人ひとりがつれあいに頼んだとか親戚に言うたとか、その一票一票の差です。原水禁、解放同盟、被爆者、それに〈デルタ・女の会〉など草の根の女の組織、労組は日教組、高教組、それに水道など自治労の単組が、ほんとによく動いてくださった。

社会党でも、こんな選挙は初めてだって驚いていました。みんなが自発的にあれをしよう、これをしようと言って、

どんどん実行する。ほんとにスゴイ選挙でした。

それに東京から田さん、土井さんも来てくださった。やっぱり土井さんはスゴイね。すごい人出でしたよ。駅前いっぱい、人、人、人……で。

内田まさとしさんも福山に来て下さったんですよ。福山空襲平和の碑に福山まで来て、献花と折鶴を……。

◆えっ、内田さんがあの忙しいご自分の選挙戦の中を……。

♥そうなんです。堂本さんも来て下さいました。清水澄子さん、久保田真苗さん、三井マリ子さん、それに大阪や京都の女性自治体議員さんも……。感激しました。

そんなことで終盤ワーツと盛り上がりつつ勝利させて頂きました。連合の中では、「ジャッシュと油揚げさらわれた」って（笑）。

マスコミの方から聞いたんですけど、小西さんはくやし涙を流したそうです。「連合で出たばかりに、〈PKO賛成〉と言えなかったのが残念だった」と。私は〈PKO反対〉を思いきり言わせてもらってしあわせでした。言いたいことを言えなくて、比例区が燃えるわけがないでしょう。

連合の偉い人や民社のえらい人が東京から来て、言ったんです。「PKOが徴兵制につながると言いまくってるのがあるが、全く根拠のないこと、ノドに小骨がひっかかっ



たようなものだ」と。それで私は言ったんです。「骨は骨でも大きい、かたい鯛の骨です」(笑)。あれでみんなが奮起した。小魚の小骨にさされてたまるか。私も、何くそ、という気になった。みんながあんまり燃えたんで、「終わりに頃、もう一回来てくれんかね」と言う人も(大笑い)。金使うて時間使うて、私らを応援に来たようなもんですよ(笑)。

◆PKOでみんな燃えたわけですけど、それだけじゃない、やっぱりタマがよかった、栗原さんがよかった、という声もずいぶん聞きましたよ。二十四年間も新聞配達を続けてらしたんですね……。

♥新聞配達は二十二歳で始めて、四十六歳の今年、六月二十四日の朝までしてました。お産と、町議選の期間中、年何日か県外出張以外、休んだことはありません。

◆新聞配達をお始めになった動機は。

♥家計の足しです。専業主婦でしたが、二人目の子どもが生まれて十か月から始めて、三人目の子の時は大きなおなかかかえて休まずに働き続けました。人に負けないものを一つ持っておこうと思って。お産の後は一か月ずつ休ませてもらいましたけど。

◆新聞配達の入金はどれくらいですか。

♥今年の四月にあがって、二万四千円です。長い間、二万

円そこそこでした。初めは一万円足らずの時もありました。◆ほかに町議の収入が……。

♥月に二十三万円。そのうち一〇%を社会党に納めます。

春夏には特別党費としてほかに六千円ずつ。あと共済の掛金などを引くと、手取りは十六万です。党費払わんでいいかと思うとったら、しっかり取るんです(笑)。でも選挙の時は公認してくれます(笑)。

◆何軒くらいお回りになるの。

♥毎朝、百軒ほどです。朝五時に家を出て。

◆自転車で？

♥いいえ、歩いて。取りに行くのは軽(自動車)で行きますけど。歩くほうがスカツとします。それを二十四年続けたので、選挙戦も体力があったのかもしれない。一か月間、分刻みのスケジュールを、点滴一つせずにやりました。

◆政治にかかわりをお持ちになったのは。

♥七三年に町会の補欠に出ました。二十七の時でした。社会党の町会議員を夫婦で応援してたんです。子どもたちの保育所、学童保育、給食などで役場に文句を言ううたので、町会に出ないかと……。熊野は、お金、酒、砂糖、海苔が効くところ。その熊野で「社会党の選挙を見せてやりたいので、体だけ貸すつもりで……」と言われました。

◆革新系を支持なさったのは、ご両親の影響ですか。

♥いいえ、父は自民党の党員、昔からの大百姓です。青春時代は南方の侵略戦争に行ったのに、常に軍歌を歌い、民主主義を生ききれなかったひと。革新は地元新聞の印刷部門で働くつれあいの影響です。

◆恋愛結婚ですね。

♥ハハ……。家を飛び出したくて。大反対を……。私は、だいたい、言うこと聞かないんですね。昔から（笑）。

◆選挙中、栗原さんがどんだんきれいになった。女は磨けば玉になる。あれは斎藤さんに見せたかった、って、広島の方々が言っていましたよ。

♥いつもジョーズにTシャツで軽自動車に乗ってるでしょ。あわててバーゲンで、五枚を八万円で買って下さったの。そしたら、いろんな人が洋服つくってくださった。ショッキング・ピンクの服も。夾竹桃の花の色だって。夾竹桃は被爆後七十年間草木もはえないと言われていた中で、最初に芽を出した植物と言われています。原爆の花、ヒロシマの花。ステキなので初登壇の時、着てきました。いま着ているこれも、カンパです。

◆初登壇のご感想は？

♥……私、知らなかったんですけど、広島って、注目の選挙だったんですね。すごいマスコミに囲まれました。「どんな議員になりたいですか」って聞かれたので、「とにかく

く悪いことはしません。ウソはつきません」って言ったんだけど、ほかの人はそんなことは言わないですってね。

私は共和、佐川、ああいうのは絶対いけん（ダメ）、と思ってた。初登壇の議員会館の前でも市民団体の人たちが横断幕立てて、「新聞（愛知から学歴詐称で出た人）は辞職せよ」と言ってたし、やっぱり、ウソついちゃいけん、と。◆そうですよ。それが大前提ですよ。私たちは議員さんに、白紙委任状と実印を渡したようなもの。その渡した人がウソをついたら大ごとです。

♥議場に入ったら、まず議席の指定があり、次が議長選挙、そして副議長選挙なんです。投票用紙と木札を持って行くんですが、階段のじゅうたんを踏む時、気が引きしまる思いがしましたね。ああ、一か月前、PKOでみんながここで牛歩をなさった、病人が出るほどご苦労なさったな……。と。今いちばん心配なのはPKOです。まして、広島にいる十三師団からも五十人出て行くと言っている。「予算がつけば事業が伸びる」のが政治。スウェーデンの研修費に一人三十四万円、もう出したものね。十月には六百人が行く……。十三師団の前で、一人でも座りこむし、一人でもおらんで（叫んで）やる、と言ってるんです。選挙の時も、自衛隊官舎の前でおらびたかったんですよ。で、呉に行った時、あそこはもとの海軍基地、今でも自衛隊が多

いので、「自衛隊員の妻から夫を、子から父を奪わないでください！」って、思いっきりおらんでやった(笑)。もしたら大好評でした(笑)。家族だって、心の中から行ってほしいとは思ってらんでしょ。

◆そうだと思います。でも、派遣隊員一人につき一日二万円の特別手当が出るという話が出てから、だいぶ風向きが変わってきたそうですよ。一日二万円、一年で七百万円の貯金ができる……。

♥はあ…、なるほど。

◆ほんとに絶望的な状況ですけど、六百人の総予算がまだ国会を通ったわけではないでしょう。だいたい、普通の市民が考えると、PKO法案は、ほんとにふしぎですね。どんな小さな職場でも、稟議を通そうとする時は、計画書と予算書を出さなければなりませんね。PKO法案は、企画書もなければ予算書もない。法案が通ったあとで、今度は、六百人に、一人一日二万円の特別手当をお給料のほかに出す、というんでしょ。そのほか総額で八十五億円！

♥非軍事文民の貢献がいくらでもできるのに。いま現地にっているインドネシアとオーストラリアの軍隊は、日本軍に来てもらわんでもいいと言っていると聞きました。

◆道路や橋をなおすだけだったら民間で十分。政府は「絶対安全な地域だ」と何度もPRしている。それならばなぜ

自衛隊が行くのか、全く理解できませんよね。しかも、その自衛隊が、国のお金でコンドームまで支給するというでしょ。

♥あれはヒドイッ！

◆アジアの人たちが聞いたら、髪の毛、逆立てて怒りますよね。慰安婦問題の意味が何ひとつわかっていない。日本人の私でも、あきれてあいた口がふさがらない。ほんとに恥ずかしい。

私たち、今、策略を練ってるんです。銃剣の先にコンドームをつけた兵隊さんがズラッと並んだポスターつくって、全国の自衛隊の塀に貼りまくろう、って。キャッチフレーズは、「自衛隊さん、ナニしにいくの？」

♥あら、おもしろいね、それは。ハハハハ……。やりましよう、やりましよう。性欲がたまりますぎて死んだいう男、聞いたことがない。なんでコンドームを……。我が精液を出す方法くらい知ってるだろうに……。

◆派兵の説明会で質問は？ って聞いたたら、第一に出たのが、「慰安所はありますか」だったそうですよ。

♥宿舎に冷房をつけると言って、現地のひんしゅくを買ったそうですね。やっぱり教育が悪い。ドイツとよく比較されますけど…。だから平気で海外に自衛隊を出せる。大学進学率は世界一だけど、日本の教育はほんとうに悪い。

◆悪すぎますね。日本がしたことを何ひとつ教えようとしていない。あれではアジアの国々が怒るはずです。

♥やっぱり女の議員をもっと増やさないと。いま広島市内の市町村議員は二千人、そのうち女は四十二人、今度私が減ったので四十一人。国会議員は私が初めてで現在一人。比例区に一人おられますけど。

◆そこからまず世直しをしたいですね。

♥でも、国会はたいへんです。私は熊野では大将だったの。与党だったので大將ができた。それに熊野町の予算は数十億、まあ大体のことはわかった。国家予算は七十七兆でしょう。

私、厚生委員会に入ることになって、昨日予算概要をもらったけれど、ひと通り見ました。厚生省にわからないところを電話して聞いたら、中には返事がすごく冷たい人、人間味のない官僚的なものの言い方する人もおられますね。「障害児が四人で一人保母を増員する」と書いてあるので、「二人増えたらどうなるんですか」と聞いたたら、「今いる保母がやることになるでしょう。園が引き受けると言えは、やれます」だって……。「園が引き受けると言えは……」だなんて、そんなあいまいな……。園が対応できないと言われた人はバスに乗って町外の施設に行っているんですよ。これでは地域で障害者が生きることにはならんでしょ。

\*

怒れ怒れ君子さん。そのすきとおった目、ウソの言えない口、悪いことをしない心が政治を変える。真っ正直なその思いは、君子さんを支え続けた広島の人たち、市民たちの心、そして、沖縄、東京で反PKO候補をあえて立てた市民の心でもある。

この市民選挙の実質的な言い出しっぺ、島山裕子さんは、心臓の持病があるのに、私に誓った。「私、お金は十万円だけです。票は千票集める」。そして、横断幕や印刷物、電話代、タクシー代等で十万円以上を使い、手弁当で千票を（少なくとも）集めた。長い間のひたむきな運動、真っ正直な裕子さんの周りに、次々に、ひたむきで真っ正直な波紋が広がっていった。広島の人千人、何万人の「裕子さん」が、また次々に、新しい「裕子さん」を生んでいったのだ。反PKO派大敗北の参院選で、沖縄と広島だけは勝った。

終わって、裕子さんは話してくれた。「もう私たち、おにぎり部隊にはなるまいって言ってるの。女を、おにぎり部隊におしこめておくのは惜しいって、周りも言い、自分たちもそう思った。女が本気で動けば、世界は変わる」

バルネラビリティー

奥川 睦

辞書をひもとくと、傷〔非難〕を受けやすいこと、弱点があること、弱み（研究社中英和辞典）、とある。形容詞形バルネラブルのところでは、傷つけられやすい、攻撃されやすい、感じやすい、などの意味も添えられている。

私がこの言葉に出会ったのは大江健三郎の世界。たしか短編集『河馬にかまれる』だったような気がする。おぼろげな記憶ながら、こんなふうだった。女友達が大江さんに向かって、「健ちゃんにはバルネラブルなところがあるネ」というような語りかけをする箇所があった。「ほら、クラスに一人くらいいるでしょう。何か周りの人間とは一つ拍子がいズれているというか、浮いてしまうような雰囲気をもった子が。繊細だったり、親切すぎたりもして、友達が何か落としたのを拾ってあげようとして、自分のお弁当をひっくり返しちゃうような。バルネラビリティーをもってるだけでも言えばいいのかナー」

それ以来、この言葉が気に入って忘れられない。それが、私とこの語との最初の出会いだと信じていた。ところがその直後、受験生の入試問題対策講座の授業でこの単語と出会い、「エー！ なら、これまでも何度か出会っていたんだろうナー」と驚いたものである。しょせん、出会いなんてそんなものだろう。

’92. 2月24日付、ロサンジェルス・タイムズは、“Then and Now”の見出しで、NOW（全米女性会議）の特集を組んでいた。一面トップに第9代（8人目。5、7代の2回はエレノア・スミール）の会長パトリシア・アイランドの写真。下にかこみ記事“The Lesbian Issue Resurface”（レズビアン問題再浮上）の記事がある。「夫の他に女性のつれあいのいることを明らかにし、NOW内での社会的イメージも議論を呼びそう」といった内容だ。

次のページに歴代会長の写真とコメント。その下に初代会長ベティ・フリーダンの会議場での写真と説明文がある。2行をそのまま引用する。

“Betty Friedan at a ’70s NOW meeting Today, women are vulnerable to a dangerous new feminine mystique” she says.

意味深長なこの形容詞をどう訳せばいいのだろう。feminine mystique は、『新しい女性の創造』と邦訳された彼女の著書のタイトルでもある。「この危険に満ちた新しい女らしさの神話（神秘感）の中で、足元をすくわれ傷つく」ことを心配しての警告か。それとも、「用心しないと女にすべて責任をかぶせられ、ごまかされてしまうよ」との語りかけか？

## 崎村尚美

うちの新聞のシルバー面に「ガンジューでえびる」というコーナーがある。このタイトルは沖縄の方言で、直訳すると、「ガンジュー」は「元氣」、「でえびる」は「です」、さしずめ「元氣です」というような意味になる。「毎週一回、元氣なおじいちゃん、おばあちゃんを紹介しているコーナーなんです、ぜひお話を伺いたいんです」。まずは電話をかけ、たずねて行く。

去年、市内の老人福祉センターに通っている女性に会いに行った時のこと。彼女は八十歳代。

「趣味はなんですか」

「お若いですね。健康の秘訣はなんですか」

「食べ物の好き嫌いは？」

五十行の記事、短時間の取材の中で書けるのはこの程度。それに、元氣の秘訣を聞きださないといけないわけで、だれに会っても同じ質問になってしまう。

決まりきったパターンをくずそうと、その日は最後に「嫌いな言葉」を聞いてみた。

「私は、おばあちゃんと言われるのが一番いや。だから、おばあちゃんという言葉が嫌いです」。

ガンと来た。自分だって「お嬢さん」などと言われると、いやな気分がするものだ。仕事先で、「お嬢さん」なんて呼ばれようものなら、思わず「崎村です」と三白眼でにらみつけたくなるもん。

若い女性だったらみんな「お嬢さん」、中年だったらみんな「お母さん」、高齢だったら「おばあちゃん」、女だったら「女性○○」。ああ、げんなりする。私だって自分にこだわる。お嬢さんや、お母さんや、女性○○としてではなく、私自身として生きて、人と付き合いたいと思う。

(名前を知らないからって、安易におじいちゃん、おばあちゃんと呼びかけていたなあ。これからいきちんと名前を聞いて○○さんと呼ぼう)。

取材の中のちょっとしたやりとりで過ぎなかったけれど、こんなことがあってから、私は呼び方にしても、付き合い方にしても年齢や外見などで区別したくないと思うようになった。

私の担当する「くらしの欄」にエッセーのコーナーがあって、四人の執筆者に週交代で書いてもらう。そのうちの一人に、重度の脳性マヒの人がいる。

原稿の締切りの日に、電動車イスに乗って二階の編集局まで持ってきてくれたことがあった。

「きょうの締切り忘れてたでしょう」

「あっ、ごめん」

前者が彼女で、謝るのが私。普通は逆だよな、なんて自分のずぼらさを反省しつつ、雑談に華が咲いた。彼女を見送った後、

「君、彼女の話すことがわかるの？」

と側にいた人が聞いて来た。

そう言えば私も、最初の頃は彼女と話すのが不安だったなあ。でも話してみたら何のことはなかった。先人観で「わからないに違いない」と決めつけてはいけけない、ということを彼女との付き合いを通して学んだような気がする。

年齢や外見で変わらない付き合い方をしようとする、自分がもろに出る。怖いと思う。魂を研ぎ澄ます作業をしていないと、怖くて人と付き合えないと思う。

記者としてよりも、自分の生き方としてどれくらい魂を研ぐできるのかな。まあ、気負わずにやっ  
ていこう。

(沖縄タイムス記者)

## あごらメイト

### 出過ぎる杭は打たれない 崎山律子さん



この人には、どんな肩書をつけたらいいのか、わからない。フリーアナウンサー、メディア・プロデューサー、イベント・ディレクター、雑誌編集長、話し方（表現）教室講師、女性学講師……。

どれも、今、彼女が活躍している分野であるが、しかし、どれも一つの肩書にはおさまりきれず、その枠からはみだしてしまう彼女である。

「私はムクチ（無口）ですから……」と言いつつ、指を六つ立てる。そう、六つも口があるのではないかと

思えるほどよくしゃべる。いや、「しゃべる」では適切な表現ではないかもしれない。とにかく飛び抜けた話術の持ち主なのだ。この人に掛かると、どんな話題も十倍おもしろくなる。

今年、復帰二十周年を迎えた沖縄は、大小のイベントが目白押し。行政、企業、団体、組織が、競うように記念行事を行なっている。そのほとんどに「崎山律子」の名前がみえる。司会やコーディネーターとしてかわることが多いのだが、彼女のことだから、単に雇われ司会では終わらない。事務局に参画し、内容まで変えてしまう。

「今、時代は“女”ですよ」男だらけの会議で、他の女性が言おうものなら総スカンをくらいそうなセリフも、彼女ならではの話術と人柄に、並いるオエラガタも納得、いつのまにか律子ベースになっている、という具合である。

沖縄の終戦記念日・六月二十三日の慰霊の日に、県が主催して行う恒例の平和祭。昨年は著名人を招いて



講演会を開いたが、千五百名収容の会場は閑古鳥が鳴いた。「やっぱり女性ですよ」律子さんの一声で、今年、シンポジウム「女性が語る平和」が企画された。変化に富んだ数々の仕掛けもあって、満員御礼の大盛況。

県の一大イベントとなった「離島フェア」にも請われて企画からかかわった。マンネリ化がいわれる中、彼女の提案で、「女性フォーラム・個性豊かに！ 女たちの島おこし」が行われ、多くの共感をよんだ。今やイベントを成功させたいならば「崎山律子」困ったときの律子頼み」の感もある。



勤めていたテレビ局を離れ、フリーになって一年。小学校に入ったばかりの息子に、少しでも多く母親としての時間を与えたいと思つての独立だったが、フリーの仕事には昼も夜も、日曜祭日もない。

「ぼく、ただいま」っていうママより「お帰り」って言うてくれるフツのママのほうがいい」

「そう！ ママってやっぱり美人すぎる？ フツくらいがいい？」

「もう！ ママったら、そんなことじゃなくて……」と、笑いこける親子である。

いま、三つも四つも仕事を重ねて抱えながら、手弁当で十月に行われる「うないフェスティバル」事務局の中心メンバーの一人として、その準備に走り回っている。

「出る杭は打たれるが、出過ぎる杭は打たれない！」と女性たちにハッパをかけながら自らも行動する崎山律子さん。彼女が行くところ、いつも新しい波が起くる。

(源 啓美)

一九九九年に生まれて

シャルロット・ケルナー著

酒寄進一訳

福武書店

「体外受精」という名の不妊治療が行われ始めた時、女性是将来「カール」という少年の出現を予知できたのだろうか。「まさか、そこまでは」の実験が今日も白衣を着た意欲的な研究者の手によって重ねられているとしたら……

この本は、一九八九年、ドイツで書かれた架空の話。養子として育った十七歳の少年カールが自分を手放した親を探すところから話は始まる。不信と混乱の日々。

事実その一、カールは体外受精児だった。父親はお金のため精子を提供し

た二十四歳の医学生。彼の精子は生殖細胞銀行で凍結保存。カールが三歳の時、交通事故で死亡。もちろんカールの誕生は知らない。母親は三十二歳の住所不明。流産三回、死産一回で子どもはいない。「流産の原因を研究してもらいたい」と排卵誘発剤の服用によって排卵した六個の卵子を提供。「一級品」とランクづけされた卵子は凍結保存。見知らぬ同士の男女が生物学上のカールの父母。

事実その二。では、受精した胚を九か月間おなかで育てた「代理母」はどこ？ それは誰？ やっと巡り会った母親は研究室のガラス窓の向こうに並んだ四つの器械のうちのひとつ。無数のケーブルとチューブにつながれ、完璧

にコンピュータ管理された母親の名は IKG/IU。「まさか！」

カールの産みの父、博士は勝ち誇って言う。「この方法で女性の妊娠、出産のための苦痛はなくなった。女性を母性に縛りつけることもない。どんな法律よりも根本的に男女同権を達成する。環境汚染、生殖能力の破壊が進むとき、人類の存続を保証するのはへ人工子宮しかない」と。何ということ

を！  
昨冬出版された『不妊—いま何が行われているのか』（レナーテ・クワイン編ヘフィンレージの会訳——晶文社）を読んだ時の恐怖がまた、私の体をつつむ。不妊に悩む女性には「もしかしらこの次には……」「ここまで耐えたのだから……」と医者がつくったプログラムに従ってゆく。余った卵は「研究のため」と称していかようにも扱わ

れる。

体外受精を初めて知った時「卵を体の外に取り出すなんてとんでもない」と思った。不妊治療で苦しんでいる女性に対してはとても乱暴な言い方ですが、卵を操作させちゃだめ、絶対に卵をとられちゃだめ！と思う。そしてレナ・テ・クラインさんが緊急に提案されている「不妊」を精神的に克服できるような、国際的なフェミニストの連帯にもとづく運動の盛り上がり、その必要性を強く感じる。

知り合いの女性からこんな話を聞きました。「兄のお嫁さん（四十歳）がね、体外受精を受けているんだけど、うまくいかないらしくて。〇〇家の子どもを産むためにいやな思いをして頑張っているのに、お姑さんが協力的でない。って病弱な母を責めるらしくてね。母も、兄も子どもはいらない、

と言ってもお嫁さんは意地になっててね」とのこと。

訳者のあとがきによれば、ドイツには現在、胚保護法という、代理母業、人の胚の遺伝子操作、クローニング、キメラ実験などを禁止する法律があって、一九九一年一月一日施行されたとのこと。

（三船照子）  
（213ページ 一五〇〇円）

アジアの人びとを知る本

環境破壊とたたかう人びと

土生長穂・小島延夫 編

大月書店

五冊シリーズの第一巻である。「アジアで生きている人びとの生活、日本の進出によってひきおこされているさまざまな問題にたちむかっている人びとのたたかいを明らかにする。そして、それをつうじて、日本のわれわれとア

ジアの人びととの連帯の課題を明確にし、アジアの人びととともに生きる道を明らかにすること」とシリーズ刊行にあたっての言葉にあるように、本書ではマレーシア、フィリピン、インドネシア、インド、タイ、韓国、台湾の環境問題とそれと闘う人びと、現地人の生活の現状が書かれている。熱帯林の伐採、資源開発、巨大ダム建設、OED、観光・リゾート開発、公害……そのどれもに日本人が大きく、深く係わっている。

我々が消費生活を満喫するために、アジアの自然と人びとの生活を取り返しのつかないまでに壊してしまったことを改めて痛いほど思い知らされた。世界経済の歴史的背景やアジア独自の内部的南北問題もわかりやすく解説されている。（荒）

（270ページ 1800円）

## 集会から

### ■忘れすぎる日本人

8・6、8・9、8・15には、例年戦争を考える集会が多い。今年も多くの集会が持たれたが、小さいけれど心に重くひびく集会もあった。△不戦兵士の会△の、木下順二氏講演会「未精算の過去」がそのひとつ。すばらしいお話だったので、その要約を紹介したい。

### ※

今日の演題を「人は未来を急ぎ過ぎる」と変えさせていただく。その理由は、後でわかって頂けると思う。

「国際貢献」にはいろんな方法があるはずだと思うが、その検討なしにいきなり自衛隊の派遣だけを言うのは、一九五一年の単独講和や、六〇年の日米安保改定以来ずっと続いている米国への従属の結果だと思う。日本国憲法生みの苦しみや悩みが忘れられているということは、歴史的にタテに見る思考が抜けているということだと思う。そこから第三世界に対する問題も出てくる。

タテ思想とは、過去だけでなく未来を含めるものである。五十年、百年先の人たちが、現在の私たちの行動を恨むか恨まないか、「過去の五十年を考えると同時に未来の五十年を考える思考」を我々の中でもっと強く打ち出してい

なければならぬと思う。

歴史に「イフ」を入れるのは無意味だと言われるが、個人の歴史、自分の過去を考える時には、「もしあの時こうしていればよかった」という痛恨の念を持つことは、未来の生き方に対して必要である。「痛恨度」とは私の発明した言葉だが、それによってその人の今後が出てくる。個人だけでなく、日本という国も、一八六八年（明治元年）までさかのぼって考えていきたい。

それを気づかせてくれたのは、藤島宇内君の「近代日本の犯した三つの原罪」説である。三つの原罪とは、沖縄差別、未解放部落問題、在日朝鮮人差別で、それをやってしまった日本近代に対して私たちは責任を持たなくてはならない。慰安婦の問題にしても、やってしまったことの勘定書を書きつけられているわけで、近代日本の犯した原罪は消えない。その原罪を背負ってゆくという考え方が必要であらうと考える。

私自身、一番痛恨度が強いのは、日本の戦犯追及を怠ったことである。国際裁判はあったが、ドイツ人自身が行なったような戦犯追及はなかった。文学者の戦争責任追及など少しはあったが、実際の効力ある形ではほとんどなかった。私自身がしなかったということでも最も痛恨度が強い。

私は戦前は社会的発言権がなく、手をきれいにしたまま

戦後、世の中に出ることができた。「手がきれいだからこそ戦争責任を追及しなければ」と考えたが、それはたいへんな誤りだったと考えるようになった。戦争責任に対する反省を多くの人がやったが、たとえば非常に誠実な人が、今度はいいことをしようと日中親善をやり出す。別人のようにはひっくり返るというのは信頼がおけない。いけないことだと自分で思ったら、もっと突っ込んでそこから何かを生み出してくれればいいけど、あれはいけなかったから今度は……と、別人格みたいにはひっくり返ってやるのは、どうも信頼がおけない。また、深刻に受けとめて贖罪の精神で何とかやろうとした人もいるが、中には時代が変わったからこうしなきゃ、と一生懸命やる人もいる。ということ、は、また世の中がひっくり返ったらそっちをやるんじゃないか、こうしたいいろんなケースを見ると、「原罪意識の脱落」を感じる。

そういうことを見てやっとな気がついた。私がなぜ戦争犯罪を犯さなかったかという点、当時、社会的発言権がなかったからではないか。仮に文学者だったなら言論報国会にでも入って、南方あたりに行って、日本軍のすばらしさを書いたかもしれない。その場に当面していたら抵抗できたかどうかかわからない。そうしてみると、「手がきれいだから他人の戦争責任を追及する資格がある」という考え方は非

常な間違いで、批判され追及される可能性を自分も充分持っているというくらい自覚がなければ、他人を追及する資格がないということにやっとな気がついた。ところがやっとな気がついた頃には、世の中が非常に整備されてきて、A級戦犯容疑だった岸信介が首相になり、もはやそれをどうすることもできなかった。

ドイツの劇作家マルティン・ヴァーサーは、「私がアウシュヴィッツの下手人でなかったのは偶然にすぎない」と書いている。私と同じような問題を考えたのだと思うが、そう気がついた時にはもう、そういう運動が難しくなってしまうている。世の中がきちんと重苦しく整備されかけたことによって気づかされたとも言える。

歴史的な意味で、ある正当なことを考えつくのは、そうでないことがたくさんなされたのを見た結果である。凡人はその時になってはじめて悟るのであって、一種の「歴史の皮肉」だが、歴史の皮肉という言葉などでは片づけられない非常に大きな問題だと思う。歴史における矛盾に押し流されるのでなく、それを克服するための良き眼をどうやったら養っていきけるか、簡単に言えるような名案はないが、そういう考え方を持つ必要があることを痛切に感じる。

前に『小さな兆候』という小文を書いたことがある。あのアメリカ人が第二次大戦後のドイツへ行って、「あのナ

チスの時代に平気で暮らしていられたのか」と聞いたところ、あるインテリが答えた。「あの当時、日常生活に追われている市民には、ナチス革命の全過程の意味を洞察できるような高度な政治的自覚を持つことなどできなかった」と。ナチス党が政権をとってから、ある日、ドイツ人の店に「ドイツ人の商店」という札がさりげなく貼られた。しばらくしてユダヤ人の店に黄色い星のマークがさりげなく貼られた。それがまさか何年か先のユダヤ人虐殺につながると考えた人はだれもいなかった、と。

丸山眞男君は、「昨日に変わらぬ今日があり、今日に変わらぬ明日があり、家々があり、店があり、仕事があり：ドイツ一般民衆の思想や性格がナチスになったわけではないが、社会の小さな変化にちっとも気づかないうちに、とめどなく順応していた」と言っている。一つ一つの措置はきわめて小さく、きわめてうまく説明され、時折、遺憾の意などが表明され、政治の全過程を最初からのみこんでいる人以外には、きわめて小さなそれらの措置の意味なんかわからない。ほんのちょっと悪くなっただけだ、だから次の機会を待とうと思う。そういう自分に慣れてしまううちに、事態は取り返しのつかぬものになってしまっている。アメリカ人の質問に答えたドイツのインテリは、こう言ったという。

「もしナチス体制最後の行為が、一番初めの一番小さな制度のすぐ後に続いたとしたら、数百万の普通の人間も反対に立ち上がったに違いない」。

太平洋戦争も、私が大学を出た頃から激烈に毎日が変わったが、そうなる前の十数年は、まさに「昨日に変わらぬ今日があり、今日に変わらぬ明日があった」。その時期はまだ抵抗が可能だったかもしれないが、激変し始めてからの数年は、抵抗は警察行きと同義になった。

これと関連して、すぐれた歴史家だった林達夫さんが、「時代の行列からは、哲学も思想も芸術も生まれない」と言ったことを思い出す。いま新宿など、若い人たちがぞろぞろと歩いているが、ナチスのドイツとか軍国主義の日本とか、強力な力が民衆を引っ張って「時代の行列」にさせてしまう。芸術も哲学も思想も生まれてこない。ただぞろぞろ従っていく。今日の日本は、ヒットラーや東条という目に見える力ではない一種の趨勢、集まってできる自然の力に引っ張られてぞろぞろと歩いているように見える。本当は考えるはずの人も考えないで、その中を歩いていればすんでしまうような行列があちこち続いているのではないかという気がする。行列に入らないためには、過去に対するこだわり、大げさに言うとか原罪意識が我々を立ち止まらせてくれるのではないか、ということを考える。

きよう与えられた演題「未精算の過去」はドイツの劇作家II演出家、ブレヒトが好きで使っている言葉だが、ブレヒトの別の言葉を借りて私が考え出したのは、「人は未来を急ぎ過ぎる」である。多くの未精算の過去を残したまま、未来を急ぎ過ぎて考えるべきことを考えない。都合の悪い過去は取り出して、それにできるだけの決着をつけて前へ進むことが必要なのに、それをやらない。やりたがらない。あるいは何らかの力でそれぞれができないように政治が運ばれていく。

そういう意味で「未精算の過去」という問題があるわけだが、未来のことを言うと、一九七〇年に発効した「戦争犯罪および人道に反する罪に対する時効不適用に関する条約」という国際条約がある。「戦争犯罪および人道に反する罪」は、東京裁判などで国際的に問題になった罪だが、このような罪に対する時効はないことにするというこの条約を、日本は批准していない。時効を成立させないということは、個人としてどうしても忘れてはならない罪があるということ。人間は忘れてはならないことをあまり早く忘れすぎる。特に日本人は忘却が非常に好きというか、忘れたがる人種ではないだろうか。

\*

声高に語られなかっただけに、胸の底に深く深くしみと

おる話だった。ロッキードも共和も、次から次に忘れていく日本人。「時代の行列」の先の深淵は……。

それにしても、こういう味わい深い催しが、新聞の催し欄にもならず、多くの人にも知られない。情報にも強者の論理が働いていることを、考えさせられた集会だった。

(一九九二年七月二十五日 於、東京・新宿) (さ)

#### ■農村女性とひざをまじえて交流

富山県越中平野は剣岳の麓に位置する、中新川郡上市町(かみいちまち)の婦人会の皆さん二十名が、はるばる名古屋まで私たち「ヘイン女性企画」を訪ねて下さったのは七月二十八日。連日の猛暑でさすがの名古屋人もぐったりしていた頃だったので、富山県の方たちも名古屋の暑さにはさぞ驚かれたことだろう。けれどそんな疲れも見せず、昼食をとりながらの交流会、街中での自由時間と元氣いっぱいの方々が多かった。

上市町と「ヘイン女性企画」とのつながりは、もとはといえば高橋ますみさんによる。彼女がおつれあいの転勤で初めて訪れたのが上市町であり、学習塾をスタートさせたのもこの町だった。昨年、富山県婦人会の研修会に講師として招かれたのが縁で、高橋さんはその懐かしい上市町で、今年三月に講演を行ない、多くの女性たちに共感されたと

いう。彼女が関わっている〈ウイン女性企画〉をぜひ訪問したいということで、会長の黒田澄子さんはじめ二十人の婦人会員と、教育委員会の方が町のマイクロバスを仕立てて来て下さったというわけだ。

遠来のお客様をお迎えして、ケータリング担当のメンバー田中世知代さんが、腕をふるってお弁当を用意した。食事をしながらも、お互い自己紹介をまじえて、にぎやかな交流が続く。地域における婦人会のあり方を話される上市の女性たちに対し、私たちは自分たちの今を語る。そんな中で、一つの部落で立て続けに三人のお嫁さんが自殺を図ったという事件を耳にし、婦人会の大半をしめるお姑さんの悩みの深刻さに言葉をなくしてしまった。皆さんがわざわざ名古屋まで来られた理由が、少し納得できたようだ。でも、答えは、解決策は見つかったのだろうか。

昼食を終えて、一行を私たちの事務所に案内する。あまり広くはないが名古屋一の繁華街にあって、交通の便は最高の場所だ。落ち着く間もなく、皆さんはおみやげを買いにデパートに向かわれた。街の中でも最先端でオシャレなトイレにご案内したが、おみやげ話のひとつにしていただけだろうか。持ちきれないほどの買物袋を手を全員が揃って、もうお別れの時間になった。今度は私たちが上市町におじゃましますという言葉に送られて、バスは出発した。

上市からの手みやげは、おいしいコシヒカリ二十キログラムと、名水百選にも入っている穴谷の霊水（あなんたのれいすい）。後日、高橋さん宅で、このお米とお水を使ってお食事が開かれた。本当においしかった！

上市町からのお礼状には、これから毎年、ウインのメンバー一人ずつ講師に来ていただきたいと書いてあったとか。富山と名古屋のネットワークは、これからますます広がっていきそうだ。

（重原惇子）

#### ■いま日本で活躍する女性のライプ版

七月二十九日、やけつくような真夏の熱気が、少しさめかけた午後六時半、霞が関ビル三十三階、東海大学校友会館ホールにおいて「下村満子さんに勝手に感謝する会」が始まった。

下村さんはご存知のとおり、突然の休刊発表で、出版界のみならずさまざまな分野に波紋、感慨を呼び起こした朝日ジャーナルの編集長。「思いがけず、最後の編集長になってしまった」（ご本人談）下村さんの二年余にわたる奮闘に感謝し、みんなで集いたいという呼びかけに、各界から百人を超す方々が駆けつけた。

当日の下村さんは、大好きだとおっしゃるピンクのスーツ姿がとてもあでやか。現役のお医者様でもあるお母様と、



おつれあいもおいでになった。この日の御馳走は、何といつても出席者のスピーチだ。食事の時間もそこそこに、次々と名前が読みあげられていく。突然のお願いにもかかわらず、お母様もスピーチをして下さった。満子さんと名づけたのは、満州で生まれたからとおっしゃるお母様は、戦争中、満子さんを抱えて弾丸の飛びかう中、診療に飛び回られた体験を淡々と語られた。続いて下村さんを支えるスタッフの方たちが、マイクの前に。少しずつ話される下村さんの人となり、お仕事ぶりが、興味深い。私は、呼びかけ人の一人、高橋ますみさんと同じ「ヘヴィン女性企画」の一員として参加させていただいたのだが、マスコミ界、政界、官界、財界、文化人……とさまざまなジャンルの著名人が多いのに、ただただ圧倒されていた。各界でのトップクラスの女性がキラ星のごとく並んだわけだ。「皆さん、お忙しい中、急なお誘いにもかかわらず、よくおいで下さいました」と司会の増田れい子さんがおっしゃったけれど、これは主催者の正直な感謝のことばだろう。そして、これだけの参加者が、ほとんど中座することなく最後まで気持ちよく過ごせたパーティーも珍しいに違いない。下村さんへのお礼や、慰労、激励のことばにとどまらず鋭い時局分析も出たステキな会だった。

個人的にも、『朝日ジャーナル』は、好きな雑誌だった。

「下村満子の大好奇心」はじめ、毎号、心待ちにしていた連載も多い。「憲法9条とPKO」「直撃佐川急便疑惑マル秘政界工作のすべて」「過労死」「熱血！ガテンの女」「心の中を覗きたい」などなど、特集のタイトルからもわかるように、「時代と添い寝をしてきた」（筑紫哲也さん談）と称された週刊誌だ。ある意味で私のテキストだっただけに、残念でならない。

けれど、下村さんがこれで沈黙してしまわれるはずはない。この会に集まった多くの女性たち、「パーティーは苦手で……」とおっしゃりながら、準備に奔走された斎藤千代さん、受付を担当されたBOCの方たち……。下村さんと同じ思いの女たちがこんなにいる。肩書に、「女性……」「女流……」が必要な時代はいつまで続くのかわからないけれど、不自由な時代だからこそ、女たちはつながっているんだなど実感したひとときだった。こんな女たちの関係を、「シスターフッド」と表現されたのは、呼びかけ人の一人、上野千鶴子さん。持参したジャーナル最終号に執筆者としてサインをお願いした時にも、上野さんは同じメッセージを下さった。

パーティーの感激とともに、このジャーナルは私の永久保存版にしようと思った。お招きいただいて、本当にありがとうございました。

（重原 惇子）

## 統一教会の正体を暴いたTBS

統一教会の合同結婚式は、日本のトップスターたちがそれに参加するというのもあって、芸能紙、スポーツ紙はもちろん、各テレビ局の朝、昼ワイド・ニュースを熱狂させた。その中でただ一つ批判的なコメントを出し続けていたTBSは、報道特集（8月23日）で徹底取材結果を報道した。

この教会の教義が、エバの行為で墮落した社会を救うことにあり、救世主は文鮮明氏とされているということに始まって、東京都内にある聖地、そこに早朝集う信者たち、信徒の寮等々を追い、かつての信者から内幕を聞き出す。信徒としての行を重ね、霊能者（トーカー）となると、靈感商品売ることが使命となる。例の多宝塔や壺商法で、かけ出しのトーカーでも月二、三千万、ベテランとなると数億〜十数億の売上をあげていたことを告白した元信者は、老女の最後のたくわえまですべて吐き出させてしまったことを、深い罪の意識として告白する。

## テレビから

ニューヨークに二万五千坪の豪邸をかまえる文鮮明氏は、かつて脱税で米国で入獄した人だが、世界に三百万の信徒を持ち、事業は、新聞、放送、建設、不動産、情報処理等幅広く、独自の衛星放送局まで持っている。佐賀県では「日韓海底トンネル」を二十億ドルの予算で試掘開始、四百メートルの試掘で中止されたままになっている。日本の自民党と深いかわりを持ち、選挙を教員が手伝っている。莫大な資産の九割は日本にあり、韓国にも土地だけでも二千八百億円を有するが、韓国内の信者は三万、一千万人の韓国キリスト教徒からは異端視されている等の内幕を紹介、世界勝共連合の一環としての素顔を暴き出した。

桜田淳子をめぐる報道合戦が加熱するなか、TBSがいち早く赤信号をともしたことは、その後の各局の報道を自粛させる一石となった。しかし、TBSのこの特番を見た人はどれくらいの人数だったろう。「数兆円のコマーシャル」をあえて無償で提供した民放各局は、報道の責任をどのように感じているのだろう。

それにしても、せめてこの百分の一でもPKO報道が行われたら、日本の政治の流れは大きく変わっていたに違いないと、改めて無念の思いが胸にあふれた。

(有)

#### 加害者としての日本

オリンピックから甲子園へ、スポーツ・フィバーの中で日本の将来を大きく左右する参院選も霞んでしまったこの夏のテレビ・新聞報道だったが、8・6、8・9、8・15には、さすがに戦争番組が見られた。例年に比べて数ぐんと少なかった分だけ、濃厚な内容のものが多かったのと同時に、強制連行、従軍慰安婦等々、加害の面を追求した番組が多かったのが今年の特徴のように思われる。

「従軍慰安婦」は、韓国に焦点を絞った局が多かった中で、NHKは、中国、台湾、インドネシア、オーストラリア、オランダ等々にも足を伸ばし、「皇軍の征く所、慰安所ありき」の実態を描いた。また、「強制連行」よりもさらに苛酷な「募兵」としての「インドネシア兵補」(シンガポール、フィリピン戦線に参加させて、約半数が戦死)や、「台湾高砂族義勇兵」を同じくNHKが追った。「世界の各国に日本は援助しているが、日本のために死に、捕虜となり、言語に絶する苦勞を味わった我々に当時の給料さえ

払っていない」と訴えるインドネシア兵補、「日本が我々を見捨てるはずがない、いつか必ず補償してくれる」と今も信じ続けて、はや生き残りは僅かになった高砂族義勇兵の姿は、カンボジア派兵の前に日本のすべきことの数々を、言外に、静かに、しかし強く訴えた。

例年敗戦記念週間の特番を組む『くらしのジャーナル』は、この何年か「戦争を知らない世代の見た戦争」を追っている。すこしあきたらない思いをした年もあったが、今年には「私はこうして人を殺した」元兵士の告白や秦驪鉄道の建設に現地人労働者を使った伯父と共に現地を訪ねた高校生の少女など、なまなかのルポライターの及ばないすぐれたレポートが光った。

(藤)

#### 東京裁判―何がなぜ裁かれなかったか

このNHKスペシャルを大きな期待を持って見た。

今まで公開されなかった連合軍資料を丹念に洗ったご苦勞はたいへんだったと思うが、裁かれなかった対象の焦点が天皇に集中しすぎていたのではなかったろうかという思いが残った。戦争責任問題が問われる度に「天皇」が浮上するのは常套手段になっているが、軍部と深くかかわった軍需産業、財閥、侵略戦争の前哨としての植民地支配の推

進者、「東洋平和」「新秩序」「大東亜共栄圏」等の構想を打ち出し推進した学者・思想家等が問われることはない。番組の終わりに、ソ連から出された三井・三菱・中島飛行機等の訴追が、アメリカとの関係で消えた経過が簡単に語られたが、「何がなぜ裁かれなかったか」をサブ・タイトルにするのなら、上記諸点にこそ光をあててほしかった。PKO法案が成立、一路、海外派兵がすすめられようとしている今、マスメディアの責任も含めて、誰が何を主張し、何を推進したかという洗い直しも、ぜひ試みられてほしいと思う。

(伊)

## 弁当のつくり手

庄和町の給食廃止問題は、印刷・電波媒体とも大きく取り上げ、子どもを取りまく諸問題の一環として話題にしたが、私の見た範囲では、町財政の破綻を給食廃止で解決しようとする問題の根源に迫る議論には至らなかった。その中で、NHK教育「視点・論点」の、立教大学浜田総長の寸評は、マスメディアを流れる一般論とはひと味違うものだった。

「給食是非論の前提として、母親が弁当をつくるもの」という大前提があるが、これがそもそもおかしいのではない

か。私は自分で弁当をつくった。弁当のつくり手は、父親でも子ども自身でも、そのほかの人でもいい。母親がつくるべし、という前提に立って、この問題を考えるのはおかしい」

ご自分で弁当をつくり続けた人を総長に持つ大学にまで、拍手を送りたくなかった。

(千)

## 政治に金はかかるのか

金丸氏の五億円証言の直後のNHK日曜朝の政治座談会、正村公平、京極純一、佐々木毅、大前研一氏らの、そうそうたるメンバー揃いとあって、大きな期待をこめて視た。示唆に富む話も多かったが、率直に言うとうれしなかった。

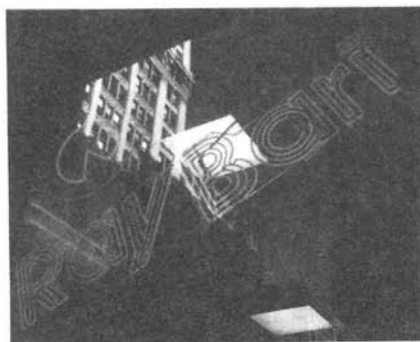
全員が、「政治は金のかかるもの」という前提に立ち、

「今の議員が自分の首を絞めるような採決はしない」とあきらめている。庶民の感覚では、なぜ政治に巨額の金がかかるのか、全く理解できない。市川房枝さんは、歳費の三分の一を、毎年、福祉関係に寄付しておられた。七五年に政治家の寄付が禁止された時、困った困ったを連発しておられたことは、今も記憶に鮮やかである。市川さんは、以来その三分の一を別途貯金してこられた。去年へあこら」が恩恵に預かった市川房枝基金は、その貯金の利息である。

市川さんの志を継ぐ人が全員、議員になれば、さまざまな悪法も改まり、日本の腐敗にも歯止めがかかるのでは……と、改めて思った。それにしても、現代日本を代表する超一流の知識人が集まりながら、市川さんの故事にふれる発言が全くなかったのは残念なことだった。

ついでに言えば、議員を維持するのに巨費が必要とは思えないが、急な選挙などで誰かを推したい時、せめて供託金を融資する制度があれば、野に埋もれた志ある人を送り出すことができるのではないだろうかと思う。もっとも、市川さんをご存命なら、きっと、「それもおかしい」とおっしゃることだろう。「推したい人を推す」ための資金集めを、今こそ行う時ではないか――。

(千)



## 数字は語る

### ●現在の自衛隊の軍事力

定員 二七万三、八〇一人  
現員 二三万四、一七七人 (充足率八五%)

### ●陸上自衛隊

#### 幹部

定員 二万二、九八八人  
現員 二万一、四三七人

#### 士(兵卒)

定員 七万三、八三五人  
現員 四万七、七三六人 (充足率六五%)

『一九九一年版防衛白書』は、このように兵卒の不足を明示している。実戦で最も必要になるのは、「士」。この不足対策として、各地で高校卒業予定者を対象に「自衛隊適格者名簿づくり」が極秘にすすめられている。

◆いよいよ選挙が始まりましたが、何をどうとらえたらよいのかわからぬままに、政治が動いてゆくのががゆい思いです。

遅くなりましたが、署名簿を送ります。慰安婦問題はそれでも関心をもっていただけようですが、イラク決議のほうは、フセイン＝悪者というイメージが強くあつて少し少なくなりました。

日本の現在のありようを恥ずかしい思いで連日ニュースを追っていますが、ますます未来がわかりません。We誌も変わり、状況も変化するなかで、へあいらの確かさがますます重要なものとなっている気がします。どの党にも加わっていないことで、友人の前に『へあいら』をもっていない読んでもらえるようにもなりました。今一歩進めて、講読までと思っています。

(市川市 横山れいこ)

◆八月一日の決意表明

へあいら阪神を作ろう！

へあいら鳥取を読んで感動。十人弱のメンバーがたった一か月ほどの間に雑誌の編集を仕上げてしまった。

仕事をして光っている女性、主婦を楽しんでいるもと活動家。私たちと近い存在の女性の何気ない日々の一瞬を鮮

やかに文字にしている。

聞いてみるとメンバーの大半は素人だという。もちろんへあいら編集部のサポートはあるのだが、ほとんどそのままの原稿が製本されたのだそうだ。主催者側のやり方を最大限に取り入れて、形にとられないのが編集部の方針でもあるらしい。

インタビュー・個人投稿、どれも私たちのまわりにあふれている事柄を取り上げているのだが、きちんと独自の主張や問題提起あるいは感想等が述べられているところが印象的だった。

もちろん大半が素人とはいえ、関わった人たちがこれまでにさまざまな経験を重ねている人たちだったからこそ、びっくりするような編集力が生まれて来たのだらうと思う。もし、未熟な私たちがやってみても満足のいく内容には仕上がらないかもしれない。だが、ダメでもともと。何とか私の暮らしている阪神間でも今の私たちの地域なりのへあいらを作ってみれないだろうか。

「ひとつのきちんとした作品を完成させる喜びは格別。自由にいい気持ちで仕事をさせてくれるへあいらは、いろいろな意味ですごいと思う。今しかないとは思ったけど、それにしてもたった一か月でよくこんなものが出来上がっ

たな。読み返してみても、たとえば何でもない題材の使い方みたいなところで、私たちも結構いい線いってゐるかなんて気になったりもするの。それにね、今回とくにインタビュを編集して文章にする面白さを実感したから、今度はぜひインタビュ本の出版を実現させたい。えっ？ 自信はあるかって？ どこまでやれか、まずやってみたらどうかかな？ やりたい。私もやりたい。最初からいいものなんてできなくてもいい。何だか元気が出始めた。

（兵庫県 すくーるすばる 石井布紀子）

◆『見えない戦争』拝読、余りに重い内容に読み進うち、あれやこれやと連想やら共感やらの思いに溢れ、感想をお送りするのが遅くなりました。

私たちが持っている情報はきわめて一方的一面的なものであったというのが、先ず最初に得た感想でありました。

くいつきにくい本題にいささか当惑しながらも、自ら現地にとんでご自分の素直な目で見たり聞いたり生の生のご報告は、何と申しましても貴重なものとして私たちの胸を打たずにはおれません。しかも同性の女性が身の危険を承知の上であえて実行されたということに、心から敬意と喝采を送らずにおけません。こんな女性が日本にもいらしたのかと率直に思わされた次第です。

世界の各地で起こる戦争は、日々のくらしに捉われがち

な私たちにとりましても、決して無縁なものではありませんし、それを正しく見据えて、しかも周囲に伝えていく作業はぜひぶんめんどうなことですので、あえてそれをなさっていらっしゃる斎藤さんに、あらためて敬意を表する次第です。

権力がマスメディアを利用して、誤った情報を流しつづけたベトナム戦争の渦中においても、真実を世界に訴え続けたジェーン・フォンタの心打つ歌を思い出します。

このたびの湾岸戦争においても、そのすさまじさに我が目をテレビに釘付けにされながら、現地司令官がとくとくと戦果を記者団に説明する中で、ある記者が死者はどのくらい出ているかと問うたのに対し、つまらぬことを聞くなと捨てゼリフを残して立ち去った姿が、ことの本質を如実に示していたように思えて忘れられません。

強い者の驕りは、行く手に打ち払い焼き払いして死者をつくりながら、まだしばらくは力を行使していくのでしょいか。いま私たちは平穏にくらしていますが、あす死者のうちに数えられない保証はないと自分に言い聞かせています。

猪口邦子さんが、「両大戦や冷戦時代は、何といっても世界は軍事大国のものであり、武力が国際政治の主軸であった。しかし、今後、地域紛争は続くとしても、対局的に

見れば冷戦の終結で、国際政治における非常的手段の重要性が高まるだろう……。戦争は、次第に時代遅れの対外手法になりつつある……」と言っておられました。去る八月十六日、深夜の真夏の夜の徹底討論、十代の若者たちの「いま、平和のために何をすべきか」で、憲法九条を守り、PKOに反対する人たちが過半数を占め、自分はどうなことがあるかと生きておりたい、死んだらおしまいだという発言を聞き、いのちの大切さと自分をかけがえのないものと思うことばとつなぎあわせ、意を強うしました。二十一世紀を担う人たちに、多少は希望をたくせる思いでした。少なくとも半世紀前の身を鴻毛の軽きにおいてという思想は受け入れられないでしょう。

将来の対象世代が武力参加を拒否するようになれば、軍事解決は成り立たなくなるでしょう。そうなってほしいと思います。

『見えない戦争』友人に送りたいと思います。三冊お送りいただけませんか。(鈴鹿市 山本和子)

◆真夏の選挙戦の嵐をくぐり、八月三日、当選証書もらい、比例代表選出の参議院議員となりました。選挙の際には、心暖まる御激励、御支援をいただき、本当にありがとうございます。

参議院会館は七二四号室。これから護憲共同として、社

会党・護憲共同の会派に所属して活動することになります。御上京の折にはどうぞ気軽にお立ち寄りください。

湾岸戦争への九〇億ドル支援と掃海艇派遣による平和生存権侵害を不法行為として、損害賠償を求めた市民平和訴訟の弁護団に参加している私は、自衛隊を海外に出動させることを本質とするPKO法案が、民意を問うことなく、多数をたのんで国会で可決されたとき、今回の参議院選挙は憲法の生死にかかわる選挙だと思い、参議院選挙に候補者として加わることを、自分の問題として真剣に考え始めました。

また私は、いくつかの女性の労働事件にかかわってきた中で、均等法の限界にもつきあたりました。均等法が成立して七年、実行性確保の手段としての調停は一件も開始されていません。多くの女性たちが均等法に失望しています。裁判を提起すれば十年を超える歳月がかかり、訴訟を提起できる女性たちはいま何人いるでしょう。次の国会では、均等法の見直しと労基法における深夜業や時間外労働の女子保護規定の改正問題がセットで政治課題となります。均等法の募集採用、配置昇進の規定の努力義務を罰則付禁止規定にし、迅速で有効な救済期間を設置し、女子のみ募集を許可して、女性を低賃金の職場にとどめる働きをしている指針や通達の見直しを求める必要があります。アフター



マティブ・アクション（積極的平等推進施策）の導入も遅れをとっています。働く女性に対する平等と保護の実現のために、法律家としての責務を全うしなければと思いました。職場のアパルトヘイトといわれるパートタイマーに対する保護立法の課題もこれに続いています。民法の改正や子どもの権利条約などの批准も目前です。

事務所を訪れる多くの外国人労働者の救済も、すでに個人の力ではどうしようもない流れがはじまっています。国連で採択された「移民労働者とその家族の保護に関する条約」の批准に向けて、早急に国内法の整備も必要です。アジアの人たちとどう共生していくのか—人権保障のシステムは、やがて国境を超えようと思います。

国際婦人年十年に世界婦人会議で採択されたナイロビ戦略の勧告は、議会等への女性の参加を一九九五年までに少なくとも三〇%を目標にしています。私はこれまで送り出す側でしたが、私に政治への参加が求められたとき、機会を与えられた女性として断ることにためらいがありました。弁護士として草の根で活動することと比べて、より多く何ができるのだろうかと考え続けました。積年の志として抱き、弁護士として三十年間、活動してきた人権と平等、そして平和の課題と状況が重なり合って、いま日本の国と私たちの生活の行方を決めようとしています。何かをしなけ

ればいけない、痛みに近い感情がこみあげて、運命の手が私の意思をわしづかみにしました。私は約三週間の後、決断しました。驚かれたことと思います。しかし選挙の結果は厳しいものでした。多くの人たちから寄せられる励ましに身がひきしめる思いをしています。

これからも公務に差し支えない限り、私の生き方の原点として弁護士活動も続けたいと思っています。御不便をおかけしたりすることも多いかと存じますが、不在の時の態勢を組んで参ります。国会の中に困いこまれてしまわないよう、皆様方とこれまでどおり友情と信頼で結び合ったかたちを大切に、生きていきたいと切望しています。ご指導の程、心からお願ひ申し上げます。（名古屋 大脇雅子）

#### 〔新入会員〕

◆新規入会を希望いたします。

福岡地方で、読書会を中心とした活動をやってきました。全ての面における差別のない交わりを模索中のところ、貴会を御紹介いただきましたので、よろしくお願ひ致します。

（福岡 光安三枝子）

#### 〔174号〕

◆今回の『慰安婦問題のつきつけるもの』は実にたくさん

の資料と事実が書かれていて、読後、しばらくは呆然としてしまうほど重いものでした。確かに戦後は終わっていないし、過去がさばかれているというより、今の私たちが問われていると実感しました。

「食物がなくて武器がなくても慰安婦だけはいた」と誰かが言っていました。終戦と同時に捨て去られ、いかにイヌ・猫なみだったかと思うと、現在のフィリピンや他の国の女の人に向ける目を思い出さずにはられません。

私はちがうとは言えない。まさに日常の延長線上のことと思えます。今生きている人がせめて、生涯生きられるお金だけでも、というのは無理な願いなのでしょう。

「あー」に出かけることもなかなかできず、斎藤さんにもお会いすることもできません。が、いつも確かな手応えで『あー』をありがたく読んでいます。

(市川市 横山れいこ)

◆174号の元従軍慰安婦の証言は、たいへんショックでした。ただ、ただ、かわいそうーで片づけられる問題ではありません。幸いにも署名用紙が入っておりしたので、私にできるのは、これしかない！ と思い、職労関係の方々に署名をお願いしました。期日がわからず、だからと回収してしまいました。(提出までにまだ時間があるようでしたら、署名運動は続けようかな？)

この件もお詫び申し上げ、用紙をお渡し致します。

※イラクの件は一般の方には理解できない点がある。(特に主婦には)

暑い折です。皆様、ご自愛の程、お祈り申し上げます。

(沖縄県 平良玲子)

〔175号〕

◆167号、171号、174号、175号、いずれも読みごたえのあるものでした。特に『従軍慰安婦』の号に係わった皆様方に深く敬意を表します。

また、永遠のテーマである『男と女』の175号も一気に読ませるものがありました。144ページの超大作、さぞ大変だったことでしょう。これは、たとえ300ページ、500ページでも埋め尽くせない、語り尽くせないテーマがありそうですね。「男と女の間には、深くて暗い河」があるのは歴然たる事実で、ここは倫理も哲学も通用しない、正に文学の世界であるわけです。娘の文章を読んでも、とても羨ましいような夫婦関係のように見えますが、むしろ私は永遠不変のものは何もないと、胸の痛いような思いをしたりするのです。

この「深くて暗い河」の部分が、人類全ての病理を引き起こしていることを考えれば、奥川先生の提起した175

号のテーマはまことに意義深いものであると思います。

122ページ、斎藤さんの「……日本の議会制民主主義は死亡いたしました……」の黒枠の貼り紙には胸の痛みを覚え、雨の中シュプレヒコールしている彼女について涙してしまったほどでした。

六月二六日の朝日新聞声欄に、大阪市の高木氏が「『ゴールデン・ベビー賞』を受けたのは総理ではありません。社会党でもありません。いまだにそんなレベルの政治を許容している国民全体、つまりあなたと私なのではないでしょうか」と言うのがありました。

今や参議院選のまったなかですが、果して死んだ民主主義は生き返るのでしょうか？ 心もとない限りです。

『あごろ』に読者の声のページがあるといいですね。原稿は書けないまでも一言、二言何か言いたいと言う人のために……。どんな読者がいるのか知るのも楽しみです。

（松山市 窪田泰子）

◆『あごろ』今回ののは本当に楽しめました。いい文章が集まってよかったですね。やわらかい言葉で綴ってあって、フェミニズム？って言う人にでもわかってもらえたんじゃないかなと思って喜んでいます。（松山 野本美智子）  
◆『男という病・女という病理』すごい！ 奥川さんがコピーディレイトされたんですね。知った方がいっぱい（清野

さん、小倉さん、そして奥川さん）いて「えっ、あごろ」は、松山へ本拠移したのかな？」と錯覚しました。いい文章書いておられますね。『あごろ』は前から興味を持っています。でも、今の私には、これ以上、手はひろげられません。それまで、奥川さんたちに頑張ってもらって、いかんは非入れて下さい。お仲間。（北条市 吉村典子）

◆先日は『あごろ』をありがとうございました。

現在のフェミニズムの状況、これからの在り方について、隙間なく論じられていて、読み応えのある、充実した編集内容です。各々の真摯で力強い語りかけは、私だけでは惜しくて、友達に読んでもらいたくて、回し読みいたします。

窪田静さんの、若々しく伸びやかな感性、爽やかで、確かな足どりは頼もしい限りです。かたや「惑々疑惑」夏井氏の味わいある人生観。この広がりも嬉しく読みました。

専業主婦の私が、以前からの唯一問題意識の「いい関係をつくりたい」においては「好き」が如何に大事か、思い知らされます。この頼りない「好き」に必要な「対等」。

「対等」がどれほど、私を活き活きさせることでしょう。気を許すと、何時か支配（強者）、被支配（弱者）の図式になります。

『あごろ』の芯にある「平等」が懐かしくて、ふと、私はずっと「平等」（好き）のために闘っているのでは、と、

気づき、胸が熱くなりました。

(熊本市 山城)

◆『あこら』175号でPKOを深く知ることができたと思いますが、それだけに棄権の多かった選挙の結果にうちのめされます。争点にさえないとはいは！ところで同封のビラの指摘は175号にもなかったと思いますのでお送りします。すでに届いているかもしれないが、(私の裁判は高裁でも敗訴し上告しました) (東京都 片岡陽子)

\* \* \*

気分はほとんど徴兵！

それでもあなたはこれを認めますか？

☆国民の命はこんなもの！

(PKO公聴会で、自民党推薦・佐藤欣子口述人)

「個人にとって自分の命ほど大切なものはない、自分の人権ほど大切なものはないのでございますけれども、それはその個人にとっては大切ですけども、そのほかの人にとってはその人ほど大切ではないのでございます。これが事実でございます。国家と社会の関係、国家と個人の関係はそういうものだと思います。ですから、もし施政者が個人の人権は地球より思いと言ったら、そのときその施政者は政治指導者としての資格を失ったと言わざるを得ないと私は思います」

☆憲法改正・核武装・徴兵！

(首相就任直前の宮沢喜一氏見解・中央口論91年9月号)  
「第一に(正常な国家を目指すという)新しい方針を実現させるためには憲法をかえなければならぬ。第二に起こることは、日本はいよいよ本格的な軍備をすることになるのですが、日本のような国にとっては核武装だと思います。第三には、こういう人手不足の時代はさらにすすみますから、おそらく軍隊をボランティアでつくることはできず、徴兵制にならざるをえない」

宮沢氏は「新しい方針」には否定的な見解を述べていたのだが、同様に否定的だったPKO法案を首相就任後は積極的に推進したように、今や三つの見解の推進役になっている。

☆どこか似ている『国民徴用令』とPKO法「雑則」

『国民徴用令』第2条……「徴用は特別の事由ある場合の外(ほか)国民職業指導所の職業紹介その他募集の方法に依り所要の人員を得られざる場合に限り之を行うものとす」(戦争中の法律)

『PKO法』第3章第11条……「本部長は……志望するもののうちから、選考により、任期を定めて隊員を採用することが出来る」

☆徴兵への歯止めは「国民感情」だけ!?

政府見解では「徴兵には個人の権利を制約するほどの公益

性がなく憲法13条に違反する」ということと、「兵役は苦役である憲法18条に違反する」という2点です。PKOが公益となり「雑則」で徴用ができる（強制労働が、苦役でなくなる）。ならば、気分だけでなくほとんどもう徴兵なのだ！

（PKO法「雑則」を広める会）

#### 〔176号〕

◆「お母さん、私死にたい」事件の記事はリアリティーがあり興味深く読みました。「自分はこう感じた」というところから出発したいと常々思いながら他人とのやりとりの中でフト見逃してしまう自分の感じ。そしてヘナヘナと自分にくずれる。あわてて遅ればせながら自分をたて直す。私、こずえさんに感嘆。美鈴さんの他人の思いのとらえ方も感心しました。

（東京都 丸山聖子）

◆四月から会員になりました。全国各地で、名も知らぬ女たちが頑張っていることに励まされ、教えられ、自分はどうしたいのか、自分はどう生きたいのかと、自分さがしの毎日です。176号の芦谷さんの「自分がどう思うか言うこと、そして自分と違う他をどこまで認めることができるかにかかっていると思う」という意見に全く同感。実際にそれができないから苦しいんですけど。何でもぶつけあえる仲間とへあ（海老名）を目ざしてやってゆきたいと考

えています。九月十九日『痴呆性老人の世界』を上映します。  
（神奈川県 田中裕子）

◆鳥取発のへあ（176号）、休憩なしに一気に一時間半。舞台の上のおひとりおひとりがそれぞれの人生の二幕目、三幕目あたりをくっきりと、さらさらと生きておられるようで、観客席から身をのり出して、読ませていただきました。ワキを固める男性軍、子どもたちも、なかなかの実力者ぞろい。

前田さんの五種の神器、かつて、毎日のように届く茶封筒の通信と格闘していた日々を思い出しました。

「へあ」とわたし」の美鈴さんの述懐調、ウンウンとうなずきながら、ごめんなさい、盛夏に秋風を感じたように、少しさびしい感慨。

最終ページのティ・タイムのカット、すてきでした。

（仙台 三船照子）



## 女の講座・女の集会

10・5	<p>新しいアジアのために'92</p> <p>ブッコス= はぐるま座ジョイントコンサート</p> <p>東條会館ホール 開場17:30 開演18:15</p> <p>フィリピンと交流する会主催 連絡先03-5496-4189</p>
10・9	<p>セミナー 尊厳死から生き方を考える</p> <p>講師 松根敦子さん 1:30 ~ 4:00 東京都労政会館</p> <p>生活科学研究所 お問い合わせ先048-838-6680</p>
10・17	<p>女くらぶバンド・コンサート</p> <p>くにたち市民芸術小ホール 6:00~8:00 (午後6時</p> <p>婦民多摩支部 お問い合わせ先0425-87-6055金沢 ~9時)</p>
10・30	<p>レア・ツェメル講演集会・パレスチナの人権と平和を考える</p> <p>札幌 6:00~ 力が出る2・7 連絡先011-752-4973 (能登)</p> <p>10・31 仙台 6:00~ 宮城県婦人会館 連絡先022-227-4893 (石川)</p> <p>11・2 名古屋 会場未定 連絡先052-524-0373 (山岡)</p> <p>11・3 大阪 なにわ会館 (予定) 連絡先0774-32-1660 (諸留)</p> <p>11・4 福岡 予定</p> <p>11・5 東京 6:30~ 神田パンセホール 連絡先03-3205-6824</p> <p>パレスチナ子どものキャンペーン (03-3205-6824)</p>
11・22	
11・23	
	<p>全障連第17回全国交流大会</p> <p>分科会 午前9:00~午後5:00 立川市中央公民館他</p> <p>11・23 全体会 午前10:00 ~午後4:00 立川市中央公民館</p> <p>主催 全障連全国幹事会 06-969-2580</p>

## リブ新宿センターに関わった女たち

からの連絡を待っています!!

私たちは1983年からリブ新宿センターの資料の整理をしてきました。整理した資料は、当時のビラ、リブニュース、パンフなどです。ビラは、取捨選択せずに全てを年代順に、リブニュースは発行号順に、コピーしてファイルに保存しています。パンフもコピーしてファイル化する予定で作業を進めています。

この間に、リブ運動や優生保護法に関心を持つ人々から、資料を読みたいと求められ、できる場合には応じてきました。特にここ数年希望者が増え、またリブ運動をとらえ返そうという研究者や著作、出版が、地味ながら多くなっているようです。しかし中には資料不足を感じるものも見られます。

古くなったビラが傷んで読めなくなる前にコピーを、ということから始めた整理ですが、上記のようなことから、整理したものを秘蔵するのではなく、公開することを考えるようになりました。資料は、直接たずさわった人々にとっての大切な経験と年月の集積ですが、リブ運動や女性史を見ていく上でも他にはない貴重な資料だと思います。整理ができた資料の原本は、私たちの会で保存しますが、公開は私たちには困難です。そのため、図書館、女性のための資料室など公共の場での公開を考えてきましたところ、横浜女性フォーラム（横浜市立）よりマイクロフィルム化して一般に閲覧させたいという申し出があり、話し合いを重ねてきました。ビラとニュースは92年度中、パンフは93年度中の実現を目指しています。

公開にあたって一番問題になるのは、個々人のプライバシーの問題であり、著作権、肖像権の問題です。私たちはこれらのことを充分配慮し、書いた人や写っている人、一人ひとりから承諾を得たいと考えています。しかし20年以上も前のことなので、連絡の取れなかった方もたくさんいます。1970年から1977年頃、リブ新宿センターに関わった女たちと連絡を取りたいのです。12月中旬頃までにご連絡頂きたいと思います。待っています。

### リブ新宿センター資料保存会

浅野京子（京）／遠藤美咲（みさき）／武田美由紀（タケ）

／町野美和（カリド）／森沢麻里／米津知子／若林苗子

連絡先：東京都中野区本町5-12-6

米津知子

横浜市緑区美しが丘1-18たまプラーザ団地3-2-105 遠藤美咲

# あごら 20 周年にようこそ!!

1972年2月うぶ声をあげた〈あごら〉は、お蔭様でことし2月、満20歳になりました。遅くなりましたが、心ばかりの成人式を祝いたと思います。

お忙しいところ恐縮ですが、ぜひおいで下さいますようお願い申し上げます。  
なお、勝手ながら会場の人数に限りがございますので、10月20日までに電話・ハガキ等でお知らせいただければ幸いです。

と き 1992年11月7日(土) 午後1時—9時

ところ にっしょう会館 大ホール

東京都新宿区市谷本村町七十九 ☎03(3269)8159

★JR、地下鉄「市ヶ谷駅」徒歩十五分 ★都営地下鉄新宿線「曙橋」

(A3出口)より徒歩七分 ★市ヶ谷自衛隊駐屯地裏

I 1時—2時 田嶋陽子のおもしろフェミニズム

——いま一番話したいこと

II 2時10分-3時半 AGORAZEIN (AGORAボトム会議)

あごら20年・女の20年

——マスコミの限界/ミディコミの限界

問題提起 奥川 睦 小島 豊子 斎藤 千代

下村満子 増田れい子

司 会 しまようこ 福田 光子

III 5時半-7時 食事と交流

IV 7時—9時 トーク&アピール 女たちの今・そして明日

(河野 信子、金住 典子ほか、いま活躍する各界女性  
のライブ版です)

参加費 A I~IV通し 4000円 (お弁当代を含む)

B I~IIのみ 1500円

C IV の み 1000円

東京都新宿区新宿1の9の6 あごら二十周年の会

☎03-3354-3941



◆四十代もなかばにさしかかろうとする今年、生まれてはじめて二度の外国旅行の機会に恵まれた。フィリピンとタイ、それぞれ一週間と十日の短い旅だったが、それが私に与えてくれたものは限りなく大きい。

バンコクのスラムにボランティアとして住んでいる友人の隣家の女性に「日本から遊びに来るなんて金持ちなんだね」と言われた時は絶句してしまった。日本の中では所得水準の低い沖縄で母子家庭をやっている私は、沖縄の中でもたぶん、いちばん貧乏の部類だろう。あり金をはたいて旅に出たのはいいが、帰ったらどうやって生活しようかと心配している。それでも彼女たちから見れば、私が金持ちであることは動かしがたい現実だ。

答えられなかった分、彼女からの問いかけは私の心に深く沈みこんだ。沖縄から日本を相対化しているつもりだった傲りに、ガツンと一発くらわれた感じだ。

「国際化時代」が叫ばれ、その中で沖縄は「南の玄関口」などともてはやされているけれど、沖縄もふくめた日本という国境を相対化する視点をもたなければ、それは新たな「大東亜共栄圏」の玄関口になってしまわないという保

証はない。

沖縄の自然を破壊しつくそうとしているものを見極める作業にもまた、その視点は不可欠のものとなるだろう。

(う)

◆疲れた！ 文章を作り、完成させるって本当にたいへんだ。こりゃあ頭というより体力だ！ この原稿を書き終わっての率直な感想だ。

『あごら』は、私にとって最も身近で貴重な情報源である。『あごら』という名称が面白い。自由な発想、地方分散型がいい。

斎藤さんの文章にいつも惚れ惚れしている。文章だけでなく、その間髪をいれずの行動力にいつも感心させられる。沖縄のハンストしかり、イラクへのピース・ビルグリムしかり。

昨年秋、那覇市役所職員労働組合女性部として斎藤さんの出前講演会の呼びかけに、このときとばかりにお願いしたところ喜んで応じていただいた。

これを機に、私は斎藤さんと親しくなり、おおいに氣をよくしている。

今回は書かせ上手な斎藤さんの笑顔がみたくて、書かせられたとでもいっておこう。

今、組合女性部長としての立場があり、私の生活の四分の一くらいは女性部のことと満ちている。この上、『あこら』まではとてもできないと思っているが、できる部分で参加させてもらおうと思っている。よろしくご指導ください。  
(裕)

◆本来、献体とは医学発展への行為（私の場合、打算的であつた）。

献体することによって、心身ともに自立できたことを訴えたかったのだが……文才のなさが恨めしい。（平良玲子）

◆沖縄から初の発信。急な企画に、たちまちこれだけの原稿が集まったのは、日常、山ほど積み重ねた実践があり、やまとに伝えたいことが山ほどおありだからでしょう。文字どおり、うだるかと思われたこの夏、やまとよりは、さらに猛暑の沖縄から送られてくる一行一行に、シャンと居住まいを正しました。

参院選大敗北、「これから」が見えないむなしさの中で、ディエゴの花のような、真紅が、「どうせ……」は捨てよう！ PKOは必ず溶かす」と、呼びかけるように感じられました。  
(千)

## あごら新着本リスト

書 名	著 者 名	出版社	定 価
ウーマン ラヴィング	渡辺 みえこ	現代書館	2060円
性の植民地	キャスリン・バリー	時事通信社	1800円
テレビ 誰のためのメディアか	鈴木 みどり	学芸書林	2270円
弁護士の眼 おんなの目	福竹 公子	崙 書 房	1800円
「モノと女」の戦後史	天野正子・桜井 厚	有 信 堂	2472円
桃色の権力	三井 マリ子	三 省 堂	1600円

へあごらは、ギリシャ語で「人と人が出会うひろば」の意味。

女の生き方、人間の解放について話しあうひろば。さくのないひろばです。

経歴も年齢も性別も関係なく、同じ平場で話しあおう。ちがう価値観にも耳傾けよう。

そして、女も、男も、生き生きと、のびやかに生きられる社会を目指そう、

と、一九七二年以来、資料誌『あごら』（年二回刊）を、また一九七七年からは『月刊あごら』を発行してきました。

特定の、管理された情報は氾濫していますが、私たちのほんとうにほしい情報は手に入りにくい現状のなかで、女の側が必要とする情報を集め、資料に基づいて討論したいと願っています。

あなたの地域の、職場の、そしてあなたの自身の情報を、どしどしお寄せください。

全国各地のへあごら拠点にもお出かけください。

●へあごらは、どの企業、どの政党、どの宗教とも、いっさい無関係。

会費と、有志の基金と、雑誌の売上代で運営しています。

●全国各地の拠点では、それぞれ、その地域に応じた活動をしています。

●現在の主な活動は、

①拠点を軸にした勉強会や社会活動

②『月刊あごら』および『特集あごら』の発行

③女性の創造力や専門的技術を集めた創造力の銀行（BOC）の運営

④読書室の運営

⑤可能性教室（英語教室、再就職準備講座など）の運営、その他。

●会費は月額六百元（月額七千二百円）、前納制。入会金は不要。

●申し込みとお問い合わせは、

〒160 東京都新宿区新宿一の九の六 あごら事務局（TEL 03-33354-3941）へ

あごら 177号 1992年 9月10日 発行

●編集 あごら沖縄

●発行所 BOC出版部 〒160東京都新宿区新宿1-9-6 ●03-3354-3941 ●振替東京0-5264

●発行人 くあごら 企画会議 定価 680円（660円＋税20円）

この ひろい宇宙に  
たった一つの地球

その 大きな地球に  
たった一人のわたし  
そして あなた

かけがえのない地球  
かけがえのないわたし

かけがえのないあなただから  
たいせつに たいせつに しよう

あなたも  
わたしも

地球も

たった一度きりの人生だから

思いきり

のびやかに生きよう

だれもが だれをも

ふみしだくことなく

胸の底まで深く息をし

ああ 生きててよかったねと  
ほほえみあえる地球にしよう

へあごら

人と人の出会うひろば

へあごら

人と人の共に生きるひろば